

追悼



2人の偉大な先生に捧ぐ

鼓先生と西川先生の訃報に接して

楠ヶ丘会名誉会長・木村 榮一

昨年(二〇一九年)、神戸市外国語大学はイスパニア学科とゆかりが深くかけがえのない先生を二人失った。神戸市外国語大学にイスパニア学科が新設されたのは一九六二年のことだが、その二、三年後に鼓直先生が新設学科に赴任されて、数年間教鞭をとられた。のちに『百年の孤独』をはじめとする数多くのラテンアメリカ文学の翻訳・紹介によって、その分野では第一人者と目されるようになった鼓先生の授業は、その学識、文学に関する造詣、スペイン語のテキストの読解と訳、どれをとっても見事なもので、われわれ学生は驚嘆の声を上げた。ただ驚嘆するだけでは能がないというので、学生も必死になって予習をし、質問を用意して臨んだが、質問に対しては簡潔明快で的を得た返答が返ってくるし、こちらのつけた訳はまるで手品のように鮮やかな手並みで修正され、茫然とするほかはなかった。授業が終わると、われわれは毎回のよう集まって、どうしてあのような見事な訳ができるのだろうか話し合ったことが昨日のこのように思い出される。先生の訳に半歩でも近づきたいと思って、ぼくたちも懸命に訳文を練り上げて授業に臨むのだが、その度に手もなく跳ね返されてがっくり肩を落としたのを今でも鮮明に覚えている。

それから数年後に先生は関東の大学に移られたが、大学に残ったぼくはその後もたびたびご自宅にお邪魔して親しく教えを乞った。いつだったかお酒を飲んでいる時に、どうすれば翻訳が上達するのか、その秘訣を尋ねたことがある。すると先生は、いい日本語で書かれた書物に接し、名訳と言われる翻訳書をたくさん読むこと、それだけだよ、と言われた。その時に先生は、これまでのスペイン語の翻訳の多くは西文和訳、つまりスペイン語で書かれたものを単に日本語に置き換えているだけで、あれは和訳であって翻訳とは呼べない、文学書の翻訳は和訳のレベルを超えて、一般読者が文学作品として読めるものにしなければならないのだと何度も言われた。以後、その言葉がぼくの金科玉条になった。

長年、西文和訳の域を脱することができなかったスペイン語の世界にあって、その殻を打ち破ったのが鼓先生の師に当たる会田由先生で、会田先生の訳された『ラサリーリョ・デ・トルメスの生涯』(岩波文庫)と『ドン・キホーテ』(ちくま文庫)はその意味で記念碑的な作品と言える。この二冊の翻訳によって、スペイン語で書かれた文学作品がようやく翻訳の世界で市民権を得たと言っても過言ではない。

鼓先生は関東に移られてからも神戸外大をはじめとする関西の大学の先生がたと交流を持たれ、多くの翻訳者が生まれてきたことは記憶に新しい。その鼓先生がこの四月初めに急逝されたのは、何としても惜しまれるが、今となってはしなやかでしかも

芯の強い日本語に訳された先生の数々の訳書を読み返しながら、その偉業をしのぶしかないのだろう。

* * *

鼓先生が逝去された約四か月後に、西川喬先生の訃報が突然飛び込んできたが、あの時は自分の耳を疑った。西川先生とは本当に長い付き合いで、同じクラブに属していたこともあって彼が入学した頃から親しくしていた。学科もクラブも同じで、しかも後輩ということもあって、当時の学科長だった高橋正武先生から、文法関係の教員として西川君を採用したいんだが、どうだろうと言われた時はわがことのようにうれしかったのを覚えている。

学部から院生時代にかけて西川先生は、旧六甲学舎のそばにある下宿で暮らしておられたので、友人や教え子と飲み過ぎて終電車に乗り遅れると、ぼくはよく彼の下宿に転がり込んだ。そういう時はたいてい学生たちを引き連れていた。いくら遅い時間であっても、懐の深い西川先生は嫌な顔ひとつせず温かく迎え入れてくれた。そのまま寝ればいいのだが、実はそこからまた酒盛りがはじまり、夜中の二時、三時、時には明け方までワイワイガヤガヤ騒いだものだった。そんな時も西川氏はにこやかな笑みを絶やさず付き合ってくれた。談論風発で、時に議論が白熱することもあったが、西川氏はつねに冷静沈着で、笑みを絶やさず人の話に耳を傾けていた。自分の意見はきっちり伝えるが、カッとなって過激な意見を吐くことはなかった。言ってみれば軽佻浮薄で青臭いわれわれの中であって、彼は揺らぐことのない重しの役を果たしていたのである。

あの下宿に関しては数えきれないほどいろいろなエピソードがあるが、そのひとつが石油ストーブ事件である。ある寒い冬の深夜、例によって前もって連絡もせず突然西川先生の下宿に転がり込んだ。彼はいつものようにおっとりわれわれを迎え入れてくれて、明け方までにぎやかに雑談に花を咲かせた。くたびれたのでそろそろ寝ようかということになり、狭い部屋でそのまま布団をかぶってごろ寝をした。朝、日が昇ったので起き出してまわりを見ると、全員の顔が煤で真っ黒になっていて、鼻の奥まで煤がたまっていた。石油ストーブをつけたまま横になったのだが、大勢の人間がひしめき合うようにして眠り込んだせいで、ストーブが不完全燃焼を起こして消えてしまったのだ。お互いに顔を見合わせて、よくまあ二酸化炭素中毒で死ななかつたものだなと大笑いしたのも懐かしい思い出である。実は、その時も西川氏は一緒になって笑い転げながらも、泰然自若としておられたのには感服した。

西川先生のこうした精神面での芯の強さは研究教育の面でも発揮された。彼の指導を受けた多くの学生の中から何人もの研究者、教員が生まれてきたことはよく知られているし、自身も神戸外大で修士号を取り、のちにスペインでもっともすぐれた大学として

知られるマドリッド大学で言語学の博士号を取得しておられる。篤学の士である西川氏は、言語学の分野で大きな研究成果を上げる一方、スペイン語教育にも情熱を注がれ、スペイン語文法の研究、教育の分野において、また研究書、教科書の分野でも特筆すべき成果を上げておられ、まだこれからという時期にあった。その意味でも、早すぎる逝去が惜しまれてならない。

「死生 命あり」という言葉があるように、生き死には人のあずかり知らぬことである。そうであれば、われわれとしてはそれを揺るがしがたいものとして受け入れるしかない。その上で、残されたものは鬼籍に入られた方々をしのびつつ、その人柄と人徳を思い返すことが何よりの功德になるのだろう。

ここまで書いてきて、ふと父が生前よく言っていた言葉を思い出した。「わしが死んでも葬式や墓参りのことなど気にせんでもええ。それよりも時々思い出してくれ。そうしたら、わしは大急ぎであの世からこの世に戻ってくるからな」

ぼくもいずれ行くことになっているあの世へ旅立つまで、鼓先生、西川先生を思い返すことで、招魂しよう。そうしたら、鼓先生と翻訳談義、文学論を戦わせた日々が、西川氏と歓談したあの下宿屋でのことが甦ってくるだろう。

合掌

目次

鼓先生と西川先生の訃報に接して	木村 榮一 2
追悼 鼓 直 先生	
鼓 直師を回想する	荻内 勝之 7
鼓先生におすがりした授業	田尻 陽一 10
鼓先生との思い出	吉川 俊介 11
追悼 西川 喬 先生	
西川喬君の思い出	池澤 栄一 15
西川君の死を悼む	岩根 圀和 17
西川喬先生の思い出	松田 侑子 19
海外便り	
無縁のメキシコが終着のメキシコに	常深 昌利 23
卒業してから	
卒業してから	佐藤 孝三 26
卒業してから	中嶋 昭 28
僕のホテルマン生活	小野 賢一 30
卒業してから	小西 悦子 32
喉元過ぎても熱さが消えないタイランド	吉田 昌洪 35
学生留学体験記	
サラマンカ大学留学体験記	葛木 伸一 39
メキシコ留学体験レポート	安永 優奈 41
イスパニア語劇団	
2019 年度イスパニア語劇団での活動	西井 孝輔 43
Libro y Pelicula interesantes	
『ブランカニエベス』	竹谷 和之 45
『イローナは雨とともに来る』	野村 竜仁 47
『ラテンアメリカ怪談集』	穂原 三佳 50
近況報告	53
神戸市外国語大学イスパニア会役員名簿	58
編集後記	吉田 昌洪 59

追悼
鼓直先生

1930年生まれ
東京外事専門学校（現在の東京外国語大学）卒
法政大学名誉教授

2019年4月ご逝去（享年89歳）

東京経済大学名誉教授 荻内 勝之

1966年（昭和41年）卒

鼓 直というと、そばに、ことぶきワインがあらわれる。
500cc入り。細身の、紺色、華奢なボトル。
サントリーという名がなかった時代。
二年生のとき José Luis Álvarez 師、スペイン国総領事が言った。
「ことぶき屋のワインはスペインのラ・マンチャ産」
ドン・キホーテの地元のワイン。

赤玉ポートワイン以外で、初めて飲むワイン。
それを、みんなに鼓が注いで回る。三杯、四杯、五杯。
「帰るな、帰るな、帰るな」
師が引き留める。
奥方が「そうよ、もう一晩」
一晩が二晩、三晩。

ある日、六甲時代、外大への地獄坂を上りきった門前で、学生が師をまち伏せた。
「先生、今日はお日柄もよく、授業は温泉で、どうでしょう」
風呂屋で。六甲キャンパスの二六八号教室とでも言っておこう。
「銭湯、いいね」
二六八教室は六甲キャンパスから坂を下って石屋川沿いにある。

湯あがりの購読の授業で「館の大広間のきざはしで」と鼓が訳す。
トントンと階段を上がるように淀みなく訳が進む。
のち、購読の授業で、立て板に水の訳を真似る者が続出した。

鼓 直が外大に着任、早々、第一回目の授業、高橋正武師が予言した。
「日本スペイン語界のホープです。やがてリーダーになります」
みんなが信じ、鼓は裏切らず、殿堂入りした。

Ortega y Gasset の『Deshumanización del arte』を読む。
「まだ二年生ですよ、読めません」と誰も言わなかった。
「夏休み中に訳して、秋、提出せよ」
秋、師が言った。「君の訳は、オルテガとはちがう道を通って、同じところに着いている」
ひと月、辞書をひきまくった。妙な自信がついた。

古本屋巡りは、鼓流を伝授され、染み付いた。古本屋などあるかしらん、こんな街に、という駅に降り立ち、左右を見て、鼻を効かせる。

師宣う。「左へいく。200 米くらいに一軒」古本屋探しには盗人の鼻がいる。

その後、交通論を講義する教授が言った。

「人間の足は 400 米から先を遠いと感じる」

ゆえに、その範囲に、まず、腰掛のある、喫茶店とパチンコ屋をおく。その先に文化がくる。

「役所か図書館がある方向に古本屋がある」という鼓 直が交通論を下敷きにしていたとはおもえない。盗人の鼻でもなく、コーヒーの匂いではないか。

コーヒーもサイフォンからドリップへと時代を伝った。

ある日、六甲のドリップ喫茶店で、師が、折り入って、と言った。

「タクシーで追突され、頸がおかしい」

百科事典のラテンアメリカ文学の項を引き受けているが、書けそうにない。代わりに書いてくれないか、との話。

その場に木村栄一もいた。前半を荻内が書き、後半を木村が。

暁教養図書出版の文学事典だった。木村にも荻内にも初仕事であった。

話を古本屋にもどす。

意外な土地の古本屋探しにお供した。

瀬戸内海の明石。駅を出て、たこ焼き屋の多い西方向で、一軒、うまいたこ焼き屋は教えてもひとに言いたくない古本屋を見つけた。

古本漁りで、京都遠征にもお供した。

鼓 直は、前任地が京都の龍谷大学であった。荻内には京都見物の案内人であった。

その日最大の収穫は、THE TIMES が 1937 年に日本で出版したスペイン語時事文の読み方教本だ。我らの JOSE LUIS ALVAREZ 師のことが出ていた。

「スペイン共和国公使 ALVAREZ がフランコ政権の送り込んだ大使ととっくみあいの喧嘩をした」公使館のあったホテル・オータニの廊下で、とある。

大日本帝国がフランコ政権を認めた直後。当時のキューバの日刊紙がかいた。

古本屋巡りを伝授された甲斐あって、4 年の時、東京へ、単独、古本を買いに行くほど成長した。アルバイトで貯めた金を、ごっそり、と言えるほどの額ではないが、それを抱きしめて行った。

題名にスペイン、ラテンアメリカとあればジャンルを問わず買った。サルバドール・ダリの挿絵入り『ドン・キホーテ』が見えた。高い位置に陳列してあって、値段も、高嶺の花届。革装丁、2 万円くらいだったか。廉価版もあった。値を覚えていないが、

それを買った。その後、大いに役立った。

アダム・スミス『国富論』のスペイン語訳も買った。400 円。開くことなく、30 年後、古本屋に出した。

4 年の卒業直前、仲間と神戸、三ノ宮の古本屋へ入った。

10 円単位で買える雑本に惹かれた。これもいいね、それも、どれもと言っているうちに、みんなで、そうしよう、と一致して、店主に言った。

「この本棚の本、全部」

店主は、黙って、泣き始めた。この商売を始めて初めてのしたことだと言った。鼓学校の弟子たちの卒業パフォーマンスであった。

1970 年春、鼓は、ガルシア・マルケスの *Cien años de soledad* を翻訳中であった。そのころ、日本語の題名は『孤独の百年』であった。

「先生、さびしく聞こえますね」

「そうだね」

「百年の孤独、ではいけませんか」

そこで新潮社に電話した。関係者が相談して、『百年の孤独』になった。

1970 年春、荻内は神奈川県日吉の鼓宅に居候していた。畳の上で師弟がゴロゴロ。「百年の孤独」はゴロゴロとウイスキーの角瓶から生まれた。

『百年の孤独』が出て間もないころ、宮崎県の焼酎蔵から訳者に問い合わせがあった。「百年の孤独、という銘柄の焼酎を売り出したいが、作者の承諾をとってくれませんか」

「荻内くん、どうすればいい」

「新潮社から著者のエージェントに連絡してもらいましょう」

まもなく、焼酎『百年の孤独』が売り出された。

2005 年の秋、荻内は『ドン・キホーテ』の翻訳で新潮社の一室に缶詰めになっていた。宣伝部長が言った。

「この書棚に鼓先生の『百年の孤独』が収めてあります。部数が二十万を越えた時に、二部、革で装丁しました。一部がここ。一部は先生がお持ちです。先生が見守っていらっしゃいます。いいお仕事をなさってください」

以上

田尻 陽一

1966年（昭和41年）卒

語劇祭でアレハンドロ・カソーナの『アルコスの粉挽屋の女房』をやろうということになった。ちょうど鼓先生の購読の授業である教材を読み終え、次の教材にとりかかる前、「先生、この作品を購読の授業で使っていただけませんか？」と頼み込んだ。快く引き受けていただいた。

授業の初日、カソーナについてレクチャーがあり、「では、作品を読んでいきましょう。でも、初日だから、誰も予習してきてませんよね」と、先生がスペイン語を読まれ、訳していかれた。予習してきていますとも言えず、先生の美しい日本語の訳文に耳を傾けていった。

鼓先生の授業を受けた方は記憶にあらうかと思うが、実に美しい日本語がとくとくと湧き出てくるような授業だった。先生が予習されていて、スペイン語のテキストにすでに日本語の訳文が小さな字で書きこまれているのではないかと思うほど、詰まることなく、「えーと」とか「あーと」とか、その場で日本語を捻りだすこともなかった。この『アルコスの粉挽屋の女房』の授業もそうだった。

さらに二日目の授業も三日目の授業も、鼓先生は学生を指名することもなく、さらりとご自分で訳されていった。これはまずいと、先生の訳された日本語を必死でノートに書き写していった。何回で読み終えたのか記憶にはないが、語劇祭までに読み終え、翻訳し終えた『アルコスの粉挽屋の女房』をガリ版で摺り、小冊子にして配布することができた。この記念物、地震のとき荷物を整理していて見つかっている。今でもどこかにあるはずだ。

吉川 俊介

1967年（昭和42年）卒

先生との思い出を考えると、小生は、先生の学ばれた事に対しての良い弟子でなかった事が良くわかり、全くの不肖の弟子と言うしかありません。先生との思い出を考えると、イスパニア語関係の学問的、というか、この件に関してのお話し等をしたことは全く無かった実事に驚いております。又、先生も研究されていた南米関係の文学的お話し等も、無知な小生に対しては一切何ら語られなかった事を良く覚えております。

先生の御不幸の前には、小生が健康的に不調になり2か月ほど入院したりしておりました。先生は小生よりも丁度一回り、午年の年上で、とても御健康でおられたので、若輩の小生が自分の健康状態を申し上げられずにおり、小生が快調になってから再度お訪ねしようと、想っておりました。今となつては、先生と何度となく東京へ行き、大学の先生、新聞社、製本関係の方々等、集まる新宿の飲み屋さんで皆様とお話になっているのを懐かしく思い出しております。お話の内容も先生の研究されている内容でなく、全く別の件で、先生とお酒仲間(?)とそれこそ内容豊富に議論(?)されたりし、それらのご意見等をお聞きしながら、小生も他の方たちのお話の中に入ったり出来て、とても楽しい時を過ごさせてもらった事を思い出されます。昔、先生が東京での学生時代を過ごされた飲み屋さんにご連れていかれた事などもあり、本当に楽しい時間を過ごさせて貰ったことを懐かしく想っております。又、東京からの帰りには東海道新幹線を外れ、多分先生の若かりし時の思い出もあるかも知れない所をご案内頂いたりしたのも、今では、とても心温かい気分になってしまっております。

先生の御不幸の一年前には、週に一度は先生の御自宅にお伺いし、外の空気を触れるのも良いですよ、等と勝手なことを言い出して、神戸市内等にお連れ出ししました事を思い出します。でも小生の体調の調子が悪くなってしまい、当方の健康不良については、快適に日々を過ごされておられる先生には申し上げること出来ずにいるうちに、訃報をお聞きし愕然としました。御亡くなりになる年初には、年賀状をいただき、お元気であることを知っておったつもりでしたのに、急な先生の御不幸をお聞きし、全く驚いております。

かれこれ、数えると約60年前には、六甲の外大から、近くに住んでおられた御自宅には、学生仲間とよく押しかけました。何度かは学友の3～4名の皆と先生の御帰宅前にお宅にお邪魔したりしまして、常に親しく接して頂いた奥様にも、食事等色々ご面倒お掛けしました事をよく覚えております。先生の跡継ぎで現在は、イスパニア語の大学の教授であるご子息の生まれる前などは、泊まり込み、先生のご自宅より外大へ出校したりしたことなどを思い出されます。

先生との思い出をあれこれと、と思うのですが、あまりにも親しくさせて頂きましたので、想いだす事が、特に出でこずに、常に普通にお付き合いさせて頂き、何をどの件を、どのようにお話をしてきたのか具体的に覚えもなく、先生にとっては全くの迷惑な不肖の弟子であったなあと、考えるばかりです。でも、先生から、あれこれとイスパニア語、南米関係の文学以外の、お話しして頂いたあれこれから、人間としての生き方を教えて頂いたものと考えさせられております。

合掌



2018年10月 イスパニア会総会にて

追悼
西川 喬 先生

1946 年生まれ

神戸市外国語大学修士課程修了 マドリード大学言語学博士
神戸市外国語大学名誉教授

2019 年 8 月ご逝去（享年 73 歳）

池澤 栄一

1969年（昭和44年）卒

今から五十四年前の昭和四十年四月の外大入学式から暫くたったある日、イスパニア学科の新入生が自発的に自己紹介を始めた。北は北海道、南は九州と実に多様な地域からはるばる神戸の地にやって来ていた。各自お国訛り丸出しで故郷の話、趣味などを披露した。西川君は「釧路の冬があまりにも厳しかったのでとにかく内地へ行きたかった。この点、父親が国鉄関係の仕事をしているので優待パスが出る。だからできるだけ遠くで暖かい所に来たかった云々」と自己紹介をしたのをよく覚えている。一方、私は出身校が「虎姫高校」だと言った時、場が急に騒がしくなったのを覚えている。「虎姫」の響きが異様だったのだろう。

さて、学生時代西川君は柔道部、私はバスケット部で汗を流した。彼は当時とても華奢な体格だったし、柔道は初めてだった。高校時代から柔道をやっているイカツイ連中を相手に練習は彼にとってさぞ厳しかったに違いない。よく四年間止めずに頑張ったものと内心感服した。

イスパニア学科は当時三十名そこそこだったと記憶している。小人数の仲間が四年も同じ教室で学ぶと仲間意識ができる。在学中のクラブ活動の仲間が卒業後集まって旧交を温めることはごく一般的だが同じ専攻科目の仲間が集うことはあまりないように思う。この点イスパニア学科は設立間もない四年目であったこと、それ故、高橋正武先生、鼓直先生など錚々たる教授陣の厳しくも暖かいご指導があったこと、一期生の木村栄一先生が大学院に進まれ助手として教壇に立たれ、これが大きな刺激となったことなどが要因かも知れない。

西川君は卒業後大学院に進み、高橋先生から語学は勿論語学以外のことについても直接厳しい指導を受けたようだ。例えば文章を書くにあたり、単なる伝言メモのようなものでも、一字一句チェックされたらしい。お蔭でその後、論文などの執筆活動に大いに役立ったと告白していた。一方私は卒業後民間会社に就職した。長い海外勤もあり西川君とは疎遠になり年賀状を交わす程度であった。

西川君と再び連絡を取るようになったのは平成十三年の春ごろだった。丁度私が会社を五十五才で早期退職した頃だった。久しくスペイン語とは縁のない仕事をしていたので忘れかけていたこともあり、西川君に相談した。一応履修生としての登録手続きを済ませたが、彼は、本来履修生は出席できないイスパニア学科専攻の授業にも「もぐり」で出席できるよう取り計らってくれた。お蔭で西川君の授業は勿論、木村先生の授業にも出させ頂くことが出来た。木村先生は授業が終わるとよく私に研究室に来ないかと声

を賭けて下さり、コーヒーまで入れて頂いて雑談をしていると西川君が入って来て三人で昔話や昨今の大学や学生の状況など楽しく語り合ったことが懐かしく思い出される。教室は女子が圧倒的多数を占め、若々しく華やかな雰囲気の中楽しく勉強させて頂いた。

「もぐり」の学生として楽しい学園ライフを二年間エンジョイした後、西川君より商業イスパニア語の先生がご定年で退職されるので、そのあとをやってみないかと打診され一も二もなく引き受けた。その後、英米学科学生対象の兼修イスパニア語や他大学のスペイン語クラスの授業も紹介してもらい非常勤講師として十年ほど勤務した。会社生活とは全く異なった環境で若い学生諸君に接し、気持ちも若返り楽しく充実した時間だった。これも西川君という親友がいたからで、彼には本当に感謝している。

七十歳になる頃イスパニア学科の同窓会の話が持ち上がった。西川君は名簿の作成のため多忙な中、大変な労力を費やして連絡の取れない仲間の連絡先を調べ名簿が完成した。

第一回は平成二十九年五月に浜松の館山寺温泉で吉田尤彦君が幹事になって開催。二回目は翌年西川君が幹事で地元太山寺温泉までしこの湯にて開催。三回目は今年私が幹事を仰せつかり故郷の長浜で開催となった。

一月下旬、私の案について西川君他有志と三ノ宮で食事をしながら意見をきいた。その時西川君は少しやせたかなという感じだったがすこぶる元気で、打ち合わせ後カラオケで陽気に楽しんでいた。その後案内状の原稿を見てもらった。かなり細かい点までコメントを頂いた。二次会で用意する酒は地元の銘酒を、おつまみにはフナずしを、など配慮の深さに感心した。第一回目の幹事だった浜松の吉田君も言っていたが、西川君より宴会が日本間なら、座椅子を準備した方がいいよとの助言を受けたい。良く気が付く人だと感心した。行き届いた配慮を簡潔明瞭な文章する才能には舌を巻く。生来のものとしても、高橋先生のご薫陶がさらに磨きをかけたのではと思う。

しかし乍ら、長浜での第三回同窓会（五月二十七日）の直前、本人から突然電話があり急に体調が悪くなり病院で診てもらったところ、外出は絶対無理と言われ断念すること。あれ程楽しみにしていたのにさぞかし残念だったことだろう。

その後、彼とは同窓会の報告などメールで連絡を取り合い元気な様子だった。7月末、私が自宅の菜園で採れたナスなどの野菜を送ったら丁寧な礼が届いた。徐々に良くなっているのだろうと思っていた。その直後、彼の訃報が届き本当に驚いた。後で聞けば彼は亡くなる直前までイスパニア会の会報編集に取り組んでいたとの事、西川君らしい最後だった。心よりご冥福を祈る。

岩根 圀和

1969年（昭和44年）卒

畏友西川君の突然の訃報に接し、学部から大学院まで机を並べ、さらに同業に身を置いて生計(たつき)の煙を立ててきた私には、語り尽くせぬ思い出の場面が走馬燈のように次々と浮かんで消える。

学部の頃、不勉強にしてかつ小生意気な学生だった私は、水曜日の一限には必ず遅刻をしていた。高橋先生の購読の時間である。ある日、先生からチクリと叱責の針を刺された私は「これはまずい」と反省はするのだが、なにしろ一限に間に合うように早起が出来ない。たかだか明石からと言うなかれ、若者の常で夜更かし朝寝の習慣がどうしても抜けなかったのである。そこで一計を案じたのが西川君の下宿に前日の火曜日から転がり込むことだった。もちろん翌日の古典の授業の下調べを共にするとの合意のもとであった。水曜日の一限、高橋先生の購読の時間にローペ・デ・ベガの名作『ペリバーニェス』を読んでいたから四年生であったろう。今ならさほどのこともない戯曲だが、当時のわれわれの学力には難しい戯曲だった。その名は思い出せないが旧外大の裏手になんとも汚い彼の下宿があった。水道もなければガスもない、トイレは共同、とにかく四畳半ひと間の長屋で名前だけはなんとか荘と立派だったのを覚えている。深々(しんしん)と冷える冬の夜、電熱器で煮たラーメンを分け合ってすすった。なんと美味であったことか。彼がサクサクと器用に皮を剥いてくれたリンゴのデザート。豪華きわまらない贅沢な夕餉であった。語り明かして夜明けともなるとさすがに猛烈な睡魔に襲われ、授業をサボってそのまま熟睡に陥りたい誘惑にかられたものだった。しかし、それでは何にもならないのでせめて仮眠を取ることにして、さて寝床がひとつしかない。煎餅布団に左右からもぐり込んだのはいいが、掛け布団がひとつとあって夢うつつに引っ張り合いである。たちまち深い眠りに引き込まれたが、今にして思えば心優しき彼は私に布団を譲ってくれていたのであろうか、明け方に寒さを覚えた記憶がない。それでもいつしか朝となってどちらからともなく飛び起きて授業へ駆けつける。かくして無事に遅刻の叱責をまぬがれたものだった。どちらが教え教えられたかの詮索は置くとして、これが後期から学期の終わりまでずっと続いたのである。その効果であろうか、おかげで成績も良くてふたりともに優を貰った。

そんなことを毎週のように繰り返したおかげで無事卒業となったのだが、柔道部員だった彼は、明日は試合だという前日、当時、評判だった『人間の条件』を朝まで夢中になって読みふけり、ふらふらになりつつも試合に出かけ、格下の選手にたちまち「エイヤッ」と投げ飛ばされると呵々大笑していた顔が今も浮かぶ。能天気なのか豪快なのか理解に苦しむがそういう愉快な一面が印象的だった。

その後、ふたりとも大学院へ進んだ。教師となってから私は横浜に居を定めたのでおいおい疎遠となってしまったが、たくさんな教科書を編纂して後輩の育成に努力を惜しまなかった功績などの活躍は関東にまで漏れ伝わっていた。ここしばらくは会う機会もなく、病気の噂もきかなかったので突然の訃報には驚いた。しばし呆然、「西川、逝ったか！」と哀哭の情抑えがたく、さらには同年齢としてわが身にも一抹の不安を覚えずにはおかない。ただただ冥福を祈るばかりである。

松田 侑子

2003年（平成15年）学部卒

2008年（平成20年）博士課程修了

西川先生は、私にとって恩人であり恩師でした。

先生の授業は教科書に沿いながらも、貴重な雑談の時間もあり、本当に楽しかったです。大学一年生の私には、スペインのお話はどれも現実のことではない気がして、そんな体験をされた先生も雲の上の存在だったのです。「私もスペインに行ってみたい。」そう思い、必死で勉強しました。先生の授業のあと、毎回毎回質問に行きました。面倒臭い生徒ですが、先生は嫌な顔ひとつせずにご返答くださいました。そのうち先生も私の名前を覚えてくれていて、本当に嬉しかったです。

修士課程在学中に就職先を決めればいいのか、という本当に軽い気持ちで修士課程に進むことにしました。修士課程はクラスの人数が学部よりずっと少なく、日によっては先生と二人きりのときもありました。人数によらず学生のレベルによらず、先生は毎回最高の授業をしてくださいました。いつでも「スペイン語を楽しんでいる」ことが私でも分かりました。

先生はいつも穏やかで怒って怒鳴るのを私は見たことがありません。私が何か間違ったことをすれば、いつも優しく諭してくださいました。先生の授業でますますスペイン語を続けたいと思った私は、外交官を目指そうと決心しました。先生にそのことを打ち明けると、「やりたいことが見つかってよかった」と応援してくれました。

しかし修士課程2年次の公務員試験は不合格でした。もう9月になっていました。私に残された道は「もう1年公務員試験に挑戦する」か「別の就職先を探す」でした。結果より、ずっとずっと応援してくれていた西川先生に申し訳ない気持ちでいっぱいでした。とにかく報告を…と、先生に報告のメールをすると、本当に素敵なメッセージが返ってきました。先生のお人柄が分かります。以下がそのメッセージの一部です。

「人生全て順風満帆というわけにもいかず、時には意に添わないこともあるでしょうから、そんなときにはどーすればいいか、心をコントロールするある種の技術が必要ですね。とりあえずは修論に没頭することですね。（中略）まあ、公務員試験だけが人生ではないし、大臣がだめなら、博士という手もあるし、それが駄目なら結婚してから恋をするという手も残っているだろうし、この世はなんでもありですよ。気を落とさないで。」

特に「結婚してから恋をする」という部分が先生のユーモアたっぷりで、私は読んで

いて笑ってしまいました。その後、先生から「よければ相談に乗るよ」と仰っていただけで、二人で話をしました。先生は開口一番に「結構元気そうじゃないか」と笑っておられました。先生に「博士課程に進むつもりはないのか」と聞かれました。私は、研究したい気はあるけれどももう9月だし、松田は就職すると皆が思っているのもそもそも指導教官がいない、と正直に答えました。先生はじっと私の話を聞いたあと、**こう**仰りました。

「それなら僕が指導教官になるよ、博士課程に進みなさい」

私は吃驚しました。私はあまり要領の良いタイプではなく、人の倍の時間を勉強にあててどうにか同期に遅れをとらぬようにしていました。もちろん、西川先生が気づかれていますはずがありません。先生の真意がつかめずに何も言えずにいると、さらにこう仰りました。

「研究者の道は厳しい。ずっと非常勤かもしれない。それでも、女性一人最低限生きていけるだけのことは僕が責任を持つよ」

先生の器の大きさがよく分かります。ここまで仰ってくださって、それに応えない人間がいるのでしょうか？私は博士課程に進むことにしました。

もし、西川先生があのお話をしてくださらなかったら、今の私はいないでしょう。今だに過去の失敗を悔いてウジウジとしているかもしれません。でも私は今、先生のおかげで、こんなに幸せに生きているのです。だって私はあのおときの先生のお言葉通りに生きているのですから。「この世は何でもあり」なんですから。

先生に結婚の報告をしたとき、とても喜んでくださいました。「自分の娘の結婚のように嬉しいです」と先生は仰りました。私は泣きました。

西川先生、本当に色々ありがとうございました。先生との思い出はいくつもいくつもあり、列挙に暇がありません。街中でキャメルのトレンチコートの男性を見れば先生かもしれないと錯覚します。居酒屋「がんこ」の看板を見つけたり、岡本真夜のTOMORROWを偶然聞くと、先生との思い出が蘇ります。先生から「松田さあん」って呼んでもらいたいです。

今この瞬間も泣いています。でもきっと西川先生は笑ってこう仰るでしょう。

「泣くというのは昇華行為だからね、松田さん、ひとりでカタルシスを感じるなんてずるいね」

最後に先生にメールをしたのは6月。返信はありませんでした。あと一週間でも、いや、1日でも早くメールをしていたら？先生から返信があったかもしれない。本当に悔しいです。先生、最後まで不出来な弟子で申し訳ありませんでした。先生と出会えたことが私にとっての一番の幸せで、誇りです。本当に本当にありがとうございました。



2018年10月 イスパニア会総会にて

無縁のメキシコが終着のメキシコに

海外便り

常深 昌利

1986年（昭和61年）卒

1976年夏の1ヵ月の米国ホームステイで世界に目覚めた自分が、ほぼ同時に会ったスペイン語と、43年も経って未だに共存しているとは、さすがに思いもしなかったこと、また今日でも不思議に感じます。

何度振り返ってみても、ここにはドラマがあります。英語は勿論、スペイン語を習得すれば、世界制覇も夢ではない、とまでは思わないにしても、神戸外大イスパニア語学科での勉学をバネに、就職は初志貫徹で商社を志望、カスティリャーノを駆使したスペインとのビジネスを目指しましたが、80年代後半に急伸した円高の影響もあり、気がつけば中南米要員となっていました。

南米からカリブ海諸国まで幅広く担当し多くの国を訪れました。今では話すスペイン語で出身国を識別できますが（メキシコ内も割と方言があり判別できます）、当初はビジネスどころか日常会話もままならず、英語で出張を乗り切ることもあり、悔しい思いをしました。そうこうする内に、1990年を境に貿易自由化や輸入関税低減化を進めていたメキシコにチャンスあり、として担当を拝命し、人生の変わり目を迎え特化して行くこととなります。

今年で滞在20余年を含めちょうど30年となる我がメキシコ史ですが、1994年の初めてのメキシコシティ駐在では、標高2,300メートルでの高地生活の中、致死量に至る大気汚染に苦しめられ、乳児で帯同した2人の息子が喘息の兆候がでたり、外出禁止令が出るほど過酷でした。また同年は大統領選挙でしたが、有力候補が演説中に射殺される事件で社会が混乱し、同年末にはこれまでのインフレ抑制政策が反動となり通貨切り

り下げが発表されました。翌1995年はテキーラショックで知られる経済危機（神戸出身の自分は阪神淡路大震災とダブルパンチ）に見舞われ、高インフレ高金利で市況が悪化し、同時に犯罪が増え無法化に近い状態となりました。その結果、短命3年の惨敗駐在でしたが、今思えば、若くして洗礼を浴びたことが、後縁に結び付いたのかも知れません。



メキシコシティ西方約80kmの Nevado de Toluca
（標高4,680m）の9合目にて

数年を経て成長路線に戻ったメキシコシティーに再び駐在のチャンスが訪れたのは2000年で、約10年を過ごすことになりました。輸送車両機械の全国輸入卸販売を手掛けた関係で、全土のお客様と消費者を訪ねました。米国国境からグアテマラ国境、東はユカタン半島に至る大都市は勿論、多くの中小村落や漁村まで訪問し、機会に恵まれなかったサカテカ州以外、31州の全てを制覇しました。メキシコは広大で日本の5倍と言われますが、実際、北西の国境の街ティファーナに空路片道3時間半（時差2時間）を日帰り出張したこと、南東の観光地カンクンに2時間飛んで代金回収に行ったこと、まさに大きさを実感したものでした。またこの10年も多くの変化を目の当たりにしました。政治では71年間続いたメキシコ制度革命党PRIが国民行動党PANに政権を奪われ、経済では中国開放経済の煽りがメキシコ経済や産業に打撃を与えていますが、それ以降はメキシコでは余り目にすることがなかった中国や韓国の居住者が急激に増えました。また、2008年のリーマンショックでは13年前の悪夢のテキーラショックが頭を過ぎることもありました。市場環境では2005年に小泉当時首相が来訪しての日墨EPA締結署名式典があり、この恩恵で現在のメキシコ自動車産業、中でも多くの日系企業進出のきっかけとなっています。



ユカタン半島メリダ南方約80kmのUxmal遺跡にて

また個人的には、今でこそ語れますが、2003年に拳銃強盗に襲われたことは、思い出だけで自然に足がすくみます（笑）。

充実した10年があったという間に過ぎ2010年にメキシコを離れましたが、再び新たな出会いと機会に恵まれ、2013年に再びメキシコに戻ることになりました。数年の市場調査を経てハリスコ州に自動車部品の製造工場を立ち上げるプロジェクトに加わることになり、州政府交渉を含めた渉外や事業会社の立上げをサポートし、2018年より製造を開始しました。メキシコですので予期せぬことや立ち往生も多々ありましたが、白地に工場設立という貴重な経験をメキシコ人スタッフと共に成し遂げることができたことは、格別な達成感があり、現在もメキシコシティーに在住しながらハリスコ州の工場に勤務しています。この3度目の滞在での著しい変化として、90年代とは異なる治安の悪化と左翼政権の樹立という局面があります。メキシコは元々テロやゲリラといった騒動が少なく、麻薬抗争も潜在はしても表面化することはなかったのですが、政権との相性が悪化し、最近10年は凶暴化に転じています。他方、ベネズエラやボリビアに象徴されるように、近年は経済格差を背景に社会主義勢力が侵攻し、メキシコもとうとう2019年よりポピュリズムを優先する政権へと変わり、今後の経済成長や国際社会における名声にブレーキを掛ける様相を呈し始めました。近年メキシコは、南米の経済

共同体メルコスールと異なり、米国カナダという身丈の違うパートナーとの間で発展してきた国ですので、政治の安定は勿論、経済的にも豊富で安価な労働力の下で、世界に競合する国に育って行ってほしいという思いが強く、それに向けて自分が何をお返しできるかを考える今日この頃です。

斯様な波乱万丈のメキシコ史ですが、何故か魅かれ続け住めば都となりました。未だにメキシコならではの難しさや理解に苦しむことが多くありますが、例えば、メキシコ人は自己防衛本能が強く言い訳が多い、他の中南米に比してプライドや学歴崇拝が高い（名前を呼ばず専門職で呼び合うこともある）、時間のルーズさ（メキシコ人の *Hasta Mañana* は・・・と中南米人から揶揄されるほど）、どれをとっても、短気沸騰型の自分は当初面喰いしましたが修正・緩和されたと思います。知られてないところでは、メキシコは未だに労働を時間で評価する風潮があり、祝日は少なく振替休日も数年前から一部導入された程度なので、労働時間だけ見れば世界トップレベルです。このような王道主義を継続し、焦りに動じないのには理由があります。広大な国土に 1.2 億人の人口と多大な天然資源を有し、アステカ・マヤ遺跡に代表される歴史資産から近代リゾートに至る観光大国でもあり、多種多様な地方文化が繁栄し食文化も旺盛で、ならば奏して国民性は豊かに育つ、つまり焦燥感を期待する方が無理なのかもしれません。少々脱線しますが、食文化はかなり満足感のある国で、自分自身も長きに渡り魅了されてきた気がします。メキシカンと言えば唐辛子、辛い物は好物ですし、特に乾燥した当地で味合うテキーラは格別で、樽やバレル単位で嗜んできました。結局、マイナスよりプラスを重んじることが身に着いたのだと思います。



南部オアハカで出会った民族衣装の女性たち

これまで自分の周りの中南米にゆかりのある先輩方から、「ラテンにはロマンがある」とか、「魔物が住む国」と教えられたことを思い出します。正反対を意味する表現ですが、変喜怒哀楽には欠かない、奥が深く事欠かない、ということを教えて頂いたのかも知れません。果してこの我がメキシコ史が、この後いつまで続くことやら。

末筆となりますが、最後の六甲学舎卒業から 34 年、神戸外大とは距離を置いてしまいましたが、外地で出会う同胞とは外大会を催して思いを寄せています。今回、想像もしなかったこのような執筆の機会を頂き、イスパニア会及び関係者の皆様には厚くお礼を申し上げます。今後とも神戸外大とメキシコの架け橋となれるような存在であればと思います。当地にお立ち寄りの際は是非お声かけ下さい。

卒業してから

卒業してから

佐藤 孝三

1971年（昭和46年）卒

1971年3月神戸外大を卒業し、4月（正確には3月26日－何故かはっきりと覚えていません）大阪の繊維商社に就職してサラリーマン生活がスタートしました。

1948年（昭和23年）生まれの我々は第1次ベビーブーマー（団塊の世代）の真ただ中で育ち、世の中は高度経済成長真っ盛り。就職氷河期という言葉すら世に存在しない古き良き時代だったと思う今日この頃です。

生まれも育ちも神戸市灘区で自宅はJR（当時の国鉄）六甲道駅のすぐ北側です。幼稚園から小中高等学校、外大までずっと徒歩で通学していましたので定期券というものを持ったのは生まれて初めてです。「これが定期券かぁ！」と喜び勇んでとは言いませんが、「さあ行くぞ！」と六甲道駅から大阪駅まではよかったです。ラッシュ時の御堂筋線梅田駅で地下鉄に乗って会社（堺筋本町）にたどり着くまでが一苦労どころか二苦労いや五苦労とでも言いたい気分で、はたして俺はサラリーマンを続けられるのだろうかとすごいカルチャーショックを受けたのを今でも覚えています。まあすぐに慣れましたけど。

繊維商社の貿易部で輸出入業務の基本を習得した後は輸入ビジネスに携わり、専ら台湾、香港、インド、パキスタン等東南アジア方面に出張していました。事情があってわずか3年3か月で退職し、今の会社（ゴム薬品商社）に転職して現在（2019年12月）に至っています。

転職してからは輸入の仕事で主に香港、中国へよく出張していました。その頃から中国茶、乾物にはまって、プライベートでも毎年2、3回は香港へ行ってお茶などを買い、食べ歩きを楽しんでいました。ところがある日総務・経理部門への異動を命じられました。少し悩みましたが、何事も経験と割り切って引受け、仕事をこなしていくうちに世の中の仕組みが徐々にわかってきたように感じました。中小企業の典型で総務・経理と言っても大企業とは違って業務内容は経理、庶務、（与信・人事・労務）管理、法務等なんでも屋さんという感じで「よろず部」という言う表現がぴったりと思います。

この間に国内に子会社が3社、中国にも現法3社計6社を抱えてグループ全体の財務等を統括する立場に置かれてしまい、まだしばらくはサラリーマン生活が続きそうです。ということでスペイン語圏とは無縁の仕事をしています。

凡そ半世紀に亘る長いサラリーマン人生のあいだに仕事の関係で、或いはプライベートで多くの外大の先輩・後輩との出会いがありました。

中国の広州交易会に何度か参加しました。交易会場でもホテル内でも多くの外大卒業生と会いました。私以外はもちろん皆さん中国学科の先輩・後輩でした。すでに日中国交正常化の後でしたが、当初は以前と変わらず友好商社の名前を借りて出張していました。同行していただいたその友好商社（天津甘栗等の食料品輸入商社）の伊庭専務が外大の先輩でした（伊庭 新太郎 II 10EB 1964 年卒）。その後公私とも長きにわたり親密なお付き合いをさせていただきましたが、残念ながら 2006 年に亡くなられました。

一方、プライベートで特に私の人生観、価値観に大きな影響を与えていただいた先輩の一人が大田俊博さん（学 2 EB 1953 年卒、2005 年ご逝去）です。直接仕事の関係はありませんが取引先の人（大田先輩と同郷で高校の同級生）が「大田、お前の学校（外大）の後輩を見つけたぞ」と言ったのがきっかけです。

当時は楠ヶ丘会（会長は秋宗さん）の専務理事という肩書で会社（広告代理店の専務、のちに社長）の仕事そっちのけ？で同窓会運営の陣頭指揮を執っておられました。暇を見つけてはよく大田専務の事務所に顔を出すうちに、「外大が移転して今の学舎が取り壊されることになった。ということで記念にエッチングを木村（木村 茂 外専 3 1951 年卒 版画家）に 3 種類、各 100 枚合計 300 枚限定で制作を頼むことにした。佐藤も当然買うだろうなあ！」と凄まれ？もちろん購入しました。これがきっかけで木村先輩とも知り合い、個展も観に行きました。大田社長の会社が北新地の境界線という好立地条件？が幸いして新地界限で頻繁に飲み歩く機会を得ました。無類の美食家、換言すれば超食いしん坊の先輩と雑談の中で楠ヶ丘会はどうやらエッチングの宣伝もせず、ほとんどが事務局で埃をかぶっているのではと判断。ここで素晴らしい？裏取引を思いつき、当時中国茶にもはまっておられた先輩に貴重な武夷岩茶（烏龍茶の一種）などを手土産に物々交換を頻繁に繰り返して、エッチングを何枚もせしめました。

学長室（当時は東谷学長）にフルセット 3 枚（東谷学長からお礼の葉書を頂きました。）、木村、西川両教授（当時）（西川先生は今年 8 月にご逝去されました。未だに信じられません。ご冥福をお祈りします。）をはじめイスパニア学科の先輩、H19（亡妻のクラス）、H20（小生のクラス）の仲間たち、弓道部 OB・OG 等々に配りました。正確に数えていませんが、4、50 枚くらいは配ったと思います。

週末に自宅でのんびりするときはリビングで壁に掛けてある遺影とエッチング 3 枚を交互に観ながら過ぎ去りし学生時代から今日までを思い出しながら酒を飲んでいきます。

卒業してから

卒業してから

中嶋 昭

1975年（昭和50年）卒

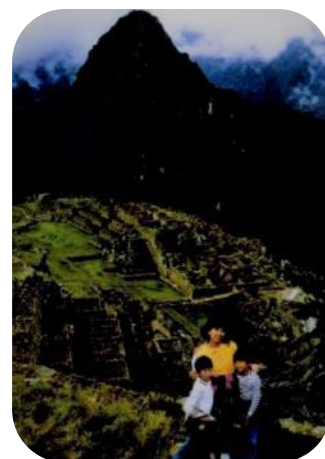
小生は学生時代スペイン語を真面目に勉強せず、イスパニア学科卒業というもおこがましく野球学科卒業と言った方が正しいかもしれません。略歴について下記の通り述べさせて戴きます。昭和50年にイスパニア学科卒業。その後商社に就職し、幸か不幸かスペイン語圏ではありませんが23年間海外駐在（内訳としては、商社時代にブラジル6.5年、パキスタン1年、タイ3.5年、フィリピン3年、商社を退社後メーカーのマレーシア工場に9年）を経験し、2012年2月末に日本帰国。その後1社での勤務の後、2014年－2016年の間、福島県の県庁で臨時職員（海外販路開拓専門員）として公務員生活。その後、福島県の日本酒の卸売り会社の海外販路開拓担当の顧問として勤務。現在はこれまでの商社時代に培った貿易実務の経験を活かし、京都の繊維関連企業の輸出サポートの仕事を続けています。

この様にお陰様で様々な経験をさせて頂きましたが、この中で特に思い出深いブラジルでの生活について述べたいと思います。



海外勤務23年のうち唯一家族と一緒に生活したのがブラジルでの5年間です。その間、イグアスの滝などのブラジル国内旅行、ペルーのマチュピチュ等の海外旅行等家族との楽しい思い出ができました。赴任時の1985年－1991年の間にはインフレが激しく、年間200%－2,900%にも達し、この間2度のデノミネーション（通貨の数字が1/1000への切り下げ及びその呼称変更）があ

りました。ひどい時には月間30%のインフレが続き、スーパーでは毎週商品の値札の付け替えが行われる程で、珠に付け替え忘れの為、同じ商品で二つの価格が存在する事態も出る始末。人々は生活防衛のため、給料を貰うと即座に買い物に走り、そのため品薄状態が起こりインフレを助長するという悪循環。当時のブラジルでは閣僚の汚職が蔓延し、ミスター10%と呼ばれる大臣も存在（鉄道の敷設工事で業者にワイロを要求、途中で工事が中止になり未完成のまま放置など杜撰なインフラプロジェクトが多々あった）する等、政府への不信感ありインフレに歯止めのかからない時代でした。



1970年代に日本の経団連の御一行がブラジルを訪問し『ブラジルは21世紀の大国』と言われ多くの日本企業が進出したが、小生の赴任時代は『大国』ではなく『怠国』と揶揄される程。このような状況でブラジル経済は低迷し、ブラジルでは貧富の差が助長され、当時の成長産業は『誘拐』と言われる程、頻発。小生・家内も夫々一度路上強盗の被害に会っています。色々と問題の多い国ではあったが、私生活では現地で知り合った友人（移住者の方で一世の方）の野球チームに入り、週末にサンパウロ郊外の日系人移住地（大概是サンパウロから100-200キロ程離れた処）のチームとの親善試合、その後のシュラスコ（ブラジル式焼き肉料理）やブラジルのお酒ピンガ（サトウキビを原料にした蒸留酒）を楽しむことが出来、今でも忘れられない思い出です。日本帰国後も商社時代の仲間・先輩に声掛けさせて戴き、神戸の野外デイキャンプ『神戸青少年公園』で定期的にシュラスコを楽しんでいます。

小生は根っからの関西人のため、海外駐在の度にタコ焼き器を持参し、その手始めがブラジルでした。当時、現地の日系人の方が主催されていたボーイスカウトに小生の二人の息子が入会し、ある時活動資金集めの為、サンパウロ西本願寺でバザーを行い、お参りに来られる日系人の方に古着や色々な食べ物を販売する催しがあり、小生はタコ焼きを担当しました。初めて見たこ焼きを遠巻きに見ていた参拝者の方達は試食するとすぐに長蛇の列ができ、結局朝の10時から午後4時まで一人でたこ焼きを焼く羽目になる程好評を博しました。これに味をしめ、小生は海外駐在するごとにタコ焼き器を持参し、折に触れて現地の日本人や外国の方にもふるまい、日本帰国後も息子の家族が来ると孫からリクエストが出るほど腕を上げました。他の思い出としては野球仲間のご家族が日本から餅つきの道具を持って来ておられ、長く使われなかった物を昔取った杵柄で、小生の声掛けで年末には餅つきを行いました。この餅つきは最後の駐在地であったマレーシアのイポーという町の日本人会で、杵・石臼を現地で作り、タイ米のもち米で餅つき大会（現地の日本人及び中華系マレーシア人約200名が参加）を行いました。この行事は今でも引き継がれています。



この餅つきは最後の駐在地であったマレーシアのイポーという町の日本人会で、杵・石臼を現地で作り、タイ米のもち米で餅つき大会（現地の日本人及び中華系マレーシア人約200名が参加）を行いました。この行事は今でも引き継がれています。

2016年10月に福島県から神戸に戻り、今は週4日の京都の会社での勤務、週2回のスポーツジムでのトレーニング、3ヶ月に1回の老人ホーム（外大イスパニア学科の同級生である北嶋さん経営の『セントポーリア愛の郷』）でボランティアで『懐メロの会』を主催等、趣味と実益を兼ねながら、人生100年を見据え健康第一の毎日を過ごしています。

以上

僕のホテルマン生活

卒業してから

小野 賢一

1981年（昭和56年）卒

私が卒業したのは博覧会の年でポートアイランドに新規開業するホテルの大量採用にもぐり込んだんです。大卒同期は100名以上。ポートライナー開通日に入社手続をして1ヶ月の研修を受けてすぐホテルオープン、同時に博覧会開幕で連日満室の状況が半年続きました。満室と言っても24時頃にはチェックアウトする部屋もあって、チーフによっては一日の締めが済んだらアウト部屋で仮眠させてくれました。ツインの片方は大体使われていなくてフロントに配属された新人はベッドの硬さを寝て自分のカラダで覚えたものです。夜勤明けに先輩が食事に連れてってくれるのも楽しみでしたね。エスカルゴやステーキランド・天外天・別館牡丹園など初めてのレストランで食事して来訪者にも紹介できるようになりました。

開業して2~3ヶ月経ったある日ペニユエラ先生から電話が掛かって来たんです。スペインから視察団が来るとかで淡路島の福良にある養殖場を見学したいと言っているので案内してくれませんか？ エええー！！ ひとりで案内なんかようせんわと悩んでいたところ、兵庫県庁にも情報が入ったらしく日西協会の方が現れて十数名のスペイン人を明石の養殖試験場にお連れしたことがありました。通訳を任されてアワビはイカナゴは何て言うの？ 栽培漁業はどう訳すの？ 冷や汗かいて乗り切りました。若き日の想い出です。その人たちは東京でケーダンレンを訪問するんだと無事に神戸を発ってゆきました。

フロント係は1年間で翌年からは宿泊予約係を経験したのですが、数年後メリケンパークに老舗ホテルが高層ホテルを開業することになり思い切って転職することにしました。商売敵に移る後ろめたさよりも新しい挑戦ができることにワクワクでした。新しい職場では地元の宿泊市場を知っているので自分で言うのもヘンですが客室予約マネージャーとして結構力を発揮できました。何しろまだパソコンがない時で、あの頃は予約を受ける部屋料金を経験で決めていました。ホテル売上の三本柱は宿泊・レストラン・宴会で、宿泊は利益率が一番高く全体の収益を左右するわけです。

著名な方の利用も多かったですね。博覧会には昭和天皇ご夫妻、レーニエ大公ご家族などもお見えになりました。なぜか私は淀川長治さんが部屋の鍵をチョウダイとこちらに手を出されている光景が頭を離れません。歌手のマドンナは1990年にワールドツアーを東京と西宮球場でスタートさせたのですが、その時は最上階のスイートのサブベッ

ドルームから家具を全部出してトレーニングマシンをたくさん持ち込んだり、スタッフ用の 33 階までの階段を走ったりしていました。

1995 年の地震では建物の躯体は大丈夫だったものの客室内ではテレビが落ちたり壁のボードに被害を受けたので 1 ヶ月半休業して復旧工事を行ないました。お客様もおらず働けるスタッフは電車もバスも通っていないため毎日出勤できないので、勤務者を限定して数日働いては 2~3 日休むという変則交替勤務をやっていました。少し落ち着いたとき客室窓の明りで文字を作り神戸市民にエールを送ることを思いつきました。提案はしたものの室内での工事は続いており営業再開に向けてそれどころではないという社内の雰囲気です。そんな中最初は一面だけ試してみるとお礼の声が届き始め徐々に流れが変わり賛成者も増えて最後は四面でのライトアップが実現しました。これはマスコミでも大きく取り上げられ忘れられない出来事になりました。

震災後は毎年のように 1 月中旬皇室の方々をお迎えしました。ある年今の上皇ご夫妻にご滞在いただいた時のことです。マドンナも宿泊したスイートには洋書のライブラリーがあってほとんどの人は装飾と思っているのですが、英国王室御用達インテリアデザイナー、デビッド・ヒックス氏の設計監修でありなかなかの古典の名著が揃っています。まさか皇后陛下がその本を手にとられるとは思っていませんでした。曝書もせずページを捲ることもなく陽当りの良い場所で我々が気付かないうちに劣化していたんでしょう。当日接遇を担当した料飲部長に背表紙が剥がれた一冊を何度も丁重に謝ってお渡し下さったと聞かされました。植物関係の本だったと記憶していますが、何と神戸外大図書館で破損を修理していただいたんです。心から感謝した次第です。

2002 年日韓同時開催のワールドカップでは神戸 FIFA 本部ホテルとなりサッカー関係者と知り合えました。その他多くのスポーツ選手・芸能人・歌手・経済人への接遇も担当できました。その後管理部門に異動となり人事労務や安全衛生・消防・取締役会関係の仕事も経験して、再び宿泊部門のロビーマネージャーとして 4 年前に 60 歳で退職しました。

イスパニア会では何度もホテルで定期総会や宴席を開催していただきありがとうございました。思い出に尽きないホテルマン生活となりました。

おわり

卒業してから

卒業してから

小西 悦子（旧姓 古川）

1989年（平成元年）卒

私は、卒業後、大阪市天満橋にある、輸送機とベアリングのメーカー、中西金属工業に就職し、海外事業部に配属され、輸出関連書類の作成等に携わりました。

その頃、中西金属工業は、主に自動車メーカー向けの輸送機を製造しており、それに伴ってスペインに事務所を開設していました。大学在学中一年間スペイン留学し、スペインでの生活が気に入っていたので、いずれはスペインの事務所で働くことが出来ればという希望を持っていました。しかし、一年経っても、そんな話は持ち上がらず、元々、体を動かすのが好きで、デスクワークで、じっとしているのが、苦痛になってきていました。

そんな時、会社帰りに大阪ヒルトンホテルにある、スポーツジムに行こうと、大丸前を歩いているとスペイン留学後にアルバイトしていたレストランのオーナーシェフに、バッタリで食わしました。彼は私より4歳年上でしたが、高校卒業後、一年間調理師学校で勉強した後すぐにスペインへ行き、マドリッドで4年間修行し、帰国後宝塚でスペイン料理店を経営していました。私は、留学後、ほんの半年ほどしか働いていませんでしたが、卒業と同時に辞めた後、閉店したことは聞いていました。大丸前で再会した時、ヒルトンの地下の地中海料理レストランでシェフとして働いている事が分かりました。その後、何度か会って食事するようになり、お付き合いするようになって、半年程で結婚し、お勤めしていた会社も辞めました。25歳の時でした。

その後主人は西宮市の『ドス・シバリス』というスペインレストランでシェフを務め、私は、義母が経営する美容室のお手伝いをする為に、難波の高島屋美容室でエステシャン修行をしていました。

が、2年程して、主人が『ドス・シバリス』を退職する事になり、いよいよ、自分たちでレストランを開こうという事になりました。しかし、当時、関西はバブル崩壊直後で、まだ、どこも、家賃が高く、当時の私たちの財力では、到底借りる事ができませんでした。

そんなある日、主人の親戚が四国の愛媛県伊予三島市に、スペイン料理店をするのにピッタリで安い物件があるというので、見に行きました。するとそれは、国道沿いに面した喫茶店でした。築年数はかなり経っていましたが、スペイン風の白い壁、オレンジ色の瓦屋根の贅沢な材料を使った、平屋の一軒家でした。家賃を聞くと、都会とは比べ

ものにならない、たったの月10万円、保証金も家賃の3か月分(当時、大阪では、家賃の10倍が当たり前)。もし、失敗しても、大阪に帰ったらいいじゃないかという気持ちで、そこで開業することにしました。

最初は、スペイン料理というものが何か分からず、以前は国道沿いの喫茶店だったということもあって、焼きそばは？カレーは？チャーハンは？と言われ、田舎の街に浸透するまで、しばらくかかりましたが、徐々に受け入れられ、次第に高松や松山といった、県庁所在地から、車で1時間近くかけて来て下さるお客様も増えました。

休みの日には、山に溪流釣りを楽しんだり、海釣りをしたり(レストランの真前が海でした)のんびり、地元の野菜や瀬戸内の魚介を使った、都会ではできない、いいレストランでした。未だに、あの頃の料理が忘れられないとおっしゃる方もいらっしゃいます。

そうこうして、3年ほど過ぎた頃、妊娠し、子供が生まれました。女の子でした。1997年、31歳の時です。子供を保育所に預けてレストランの手伝いをしようかと、保育所を見に行きましたが、どうしても、預けることが出来ませんでした。近所に知り合いもおらず、子供をバギーに乗せて海辺をポーッと歩いていると、寂しくて寂しくて。主人も、そんな私を見かねると、元々、四国にずっと留まる気もなかったもので、そろそろ、大阪に帰ろうかという事になりました。そんな時、美容室を経営していた義母から、大阪北浜にいい物件があるから、見にこいと言われ、主人が12月の忙しい最中、見に行き、即決しました。その頃には、バブル期より家賃も下がり、四国でのレストランの営業実績もでき、地元の信用金庫で融資を受ける事ができました。その6か月後、1998年6月『エル・ポニエンテ』というレストランを開業しました。

その後、日本初の立ち飲みバル『ゴソ』を同じく北浜に開業すると、外に溢れるほどお客様が来られました。淀屋橋すぐに『カルボン』という炭焼き料理の店を、その数年後には、カルボンの向かいに『ファロ』というパエジャ専門店、中之島ダイビルに建て替えまでの数年間ということで『カボ』というカジュアルレストラン、ホテルマチに高級レストラン『オラ』、梅田に『ゴソ・ウメダ』、



20周年パーティ (左：主人、右：娘)

堂島にバスク料理店『アマルール』と、一時期は7店舗もありました。現在は、リーマンショックの影響で『オラ』を閉め、人手不足の影響で『カルボン』『ゴソ・ウメダ』を閉めて、4店舗になりました。お陰様で、2018年には創業20周年を迎え、主人は、厚生労働大臣賞をいただきました。

こうして、私の周りには、主人と知り合った事で、常にスペインがあります。18年前から、フラメンコギターを習い始め、ちょっとした踊りのギター伴奏も、出来るようになりました。スペイン語を話す機会はそんなに多くはありませんが、ワイナリー訪問したり、ワイナリーの方が来られる時には、全く問題なく会話を楽しむ事ができます。これは、神戸外大イスパニア学科で鍛えられたお陰だと思っています。

喉元過ぎても熱さが消えないタイランド

卒業してから

吉田 昌洪

1994年（平成6年）卒

1995年から2008年までの13年間、僕はタイのチェンマイという街に住んでいた。その経緯や理由やらを全部書き出すとそれだけで本が一冊できそうなので割愛するが、この13年という年月の間に、それはそれは貴重な体験をさせて頂いた。とはいえタイから本帰国してすでに10年以上。かなり記憶がおぼろげになりつつある中で、いまだに記憶に焼き付いている経験を、備忘録がてらにここで紹介したいと思う。

『何メートル掘りますか？』

小さな工場を建てることになった。その時に初めて知ったのだが、当時のチェンマイは街の中心部以外はインフラが全く整っていなかった。電気が欲しけりゃ自分で電柱を買って電気局に申請して工事をしてもらう。この世に「電柱屋」というものがあることもこの時に初めて知った。電話が引きたければ電話局に申請をし、いつになるかわからない電話線延長工事をひたすら待つのである。上下水道は？「水道は井戸を掘って地下水をくみ上げて、下水は地下にタンクを埋める。当たり前じゃないですか？」いや、想像もしてなかったです。で、井戸ってどうやって掘るの??大丈夫。ちゃんと「井戸掘り工務店」みたいな業者がいるんです。供給は需要から生みだされるのです。

というわけで、井戸掘り工務店との打ち合わせ当日。「さて、何メートル掘りますか？」いや、まったく分かりません想像もつきません。普通は何メートルくらい掘るんですか？「5メートルくらいですかねえ。」じゃあ5メートルで。「え？本当に5メートルで良いんですか？」え？ダメなんですか？それがわからないから何メートルがいいのか聞いてるんですが。「いや～お客さんの指示した深さしか掘れないんですよ～。で、何メートル掘りますか？」



街はけっこう
オシャレさん

パニックが収まってからよくよく説明してもらおうと、5メートルくらい掘れば水自体は出てくるらしいが、井戸が浅すぎると雨が少ない年には水が枯れる可能性が高いらしい。深く掘れば掘るほど水は確実に出てくるが、その分費用はかさむそうだ。「で、何メートルにします？」考えても答えなんて出るはずもないので、10メートルだか15メートルだか忘れたが、それくらいで適当に深さを決めた。あの～、もし掘っ



た井戸が枯れてしまったらどうするんですか？「え？また新しい井戸を掘れば良いんですよ。その時にはまた依頼してくださいね。」

『助け合わないとね』

2004年12月26日朝8時頃。揺れた。どこかで爆発でもあったのかと思い慌てて外に出た。それが地震だとわかったのはしばらく時間が経ってからだった。震源地はチェンマイから約2,000km離れたインドネシア。そしてクリスマスホリデーで賑わうタイのリゾート地プーケットを大きな津波が襲ったのは、地震から2時間ほどしてからだった。死者・行方不明者は被災地全域で23万人近くに上り、タイでも5千人を超す犠牲者が出た未曾有の大惨事。タイの人達はすぐに国を挙げて一致団結し被災地と被災者救済に全力を尽くした。小さな町の役場、町中に無数ある大小のお寺、市場やデパート等、あちらこちらに募金箱が設置され、寄付や救援物資の受付が始まった。

「これからプーケットに向かいます！何でもいから物資を持ってきてください！プーケットまで届けます！」チェンマイにある小さな運送会社の社長が空っぽのトラックを走らせる。トラックはすぐにいっぱいになった。他の運送会社もすぐにこれに倣い、プーケットへ向かう長いトラックの列が国を縦断し、何度も被災地を往復した。

「うちの工場でも寄付を集めて持っていきたいんです。」スタッフから声をかけられた。みんなで集めた寄付金と水や食料等の救援物資を近くの役場に持っていった。

会う人、会う人、みんなが言う。「こんな時は助け合わないとね。」



ハマってました。大好きです

この時期のタイは「少しでも助けてあげなくちゃ」という願いに国中が包まれていて、思わず涙ぐんでしまうような場面やニュースに何度も遭遇した。もっと掘り下げれば、火事場泥棒とか（泥棒に入った輩は現地住民にボコボコにされたらしい。。。）、救援物資配送の不手際とか、殺到したボランテ

ィアの機能不全とか、そういう状況もあったのかもしれないが、僕はただただタイの人々の純粹さと慈悲深さに圧倒されていて「タイって良い国だなあ」とじんわりと感動し続けていた。ただ、少しだけ意地悪を言うと、タイの人は「遠くの見知らぬ困っている人たち」には本当に驚くほど親身に手を差し伸べるが、「すぐ近くで困っている知人や親戚」には意外に冷たく無関心だったりする。遠くの誰かを救うのは仏教の「施しの教え」に従う尊い行為だが、近くにいる困った人たちは「自業自得」だから自力で勝手

に何とかせい！という考えがその底にはあるのかもしれない。知らんけど。

『みんな違ってみんな良い』

タイにいる人は本当に多種多様。肌黒い人、チャイナちっくな人、アラビックな人、西洋アジアハーフ的な人。出自による多少の風習の違いはあれど、みんな同じ社会で同じように生活している。ここ数年日本でもよく話題になる LGBT とかダイバーシティ的な観点でいうと、タイはある意味最先端にいて、同性愛カップルは公言する必要もなくあちこちで普通にイチャイチャしているし、わかりやすいオカマちゃんも見た目麗しき元男性のお姉さんも、わざわざ探さずともそこらへんにウロウロしている。人種的にも文化的にも「単一」に慣れてしまった日本では、こういう「普通の」から少し外れている人達に対しては、「大丈夫ですよ、僕たちは気にしませんよ。ちゃんと受け入れますよ。」という、ややよそよそしい姿勢で身構えてしまいがちだが、タイの人達はそんなまどろっこしいことはしない。



慣れるんです



恩師が来てくれました

「オカマ！うるさい！だから嫌いやねん！」とか、「クネクネ腰振るな、気持ち悪い！」とか、けっこうな剛速球をど真ん中に投げる。言われた方も「うるさいわねえ、面白くない奴！」とか「あらあ〜キレイだからって妬いてるんじゃないの〜？」とか、なかなか見事に打ち返す。ただ、こういう言い合いをしているのは、たいてい同じ学校の同級生とか、職場の同僚とかの知り合い同士で、お互いギョアギョア文句を言い合ったあとで、仲良く一緒にご飯を食べていたりする。

違いは違い。みんな違うのは当たり前。でも好き嫌いは好き嫌い。それを我慢する必要もない。あなたが悪いわけではない。でもあなただけが正しいわけでもない。みんな違ってみんな良い。だから遠慮なく何でも言って。

僕がタイで過ごした長い年月でタイの人たちに教えてもらったことは言葉にするとこんな感じだろうか。

スマホというツールのおかげで、誰もがネット上で自分の意見を自由に言えるようになった。そしてどこかの誰かが何気なく言ったひと言は、目に見えない匿名の大多数が時代の気分次第で共有している「それは違うんじゃないの？」という曖昧な判断基準で「絶対悪」の烙印を押され、それを不特定多数の人が滅多打ちにして吊るし上げていく。

結果として、目に見えない「大きな意思」にそぐわないことは容易に発言できなくなっていて、ますます社会が不自由で窮屈になってきているような感じがする。

そういうニュースや出来事を目にすると、「意見が違って仲良くはできるんじゃないのかなあ、、、」と思いながら、「オカマ！うるさい！」と文句を言い合いながら一緒に仲良くご飯を食べていたタイの人たちの潔さを懐かしく思い出したりするのである。

サラマンカ大学留学体験記

学生留学体験記

葛木 伸一

イスパニア学科 4年

サラマンカ大学・翻訳学部における10ヶ月間で学んだこと、感じたことを以下にまとめさせていただきます。

身の回りの景色や、見聞きする言語、文化や習慣のほとんどすべてが変わる環境の中での生活は毎日が勉強でした。とりわけ、留学当初の明らかな文化や習慣の違いから生まれる新鮮さが無くなってきた頃、つまり、私がそこで生活する人として地域に溶け込むようになってからの新しい学びには大変な価値があったように思います。何気ない生活の中でふと気付く瞬間、この瞬間を経験するためには、まわりの環境の変化ではなく、自分自身のまわりに対する意識の変化が必要であり、意識の変化をもたらすには学問の場に於いても、何気ない日常の一コマに於いても意識を高めることが必要で、たくさんの人々と接するなどして自らの教養を深めておく必要があるのだと感じます。

長期間、海外で生活する上で得られるものはたくさんあると思いますが、私が経験できて良かったと感じるのは「外国人としての自分」を意識できた事です。これは島国日本に居座ってはいはず経験できない事だと思います。サラマンカにはヨーロッパ各国をはじめ、世界中から学生が集まってきます。その雑多な人種が混じり合った環境での生活を送る中で、ふと気付く瞬間というものが私の中にありました。それこそが「外国人としての自分」を意識する瞬間であり、「日本人としての自分」を意識する瞬間でもあります。文化や習慣或いは歴史の観点における多くの違いに出会うからこそ「自分自身」が浮かび上がってくるわけで、そこに、日本人が海外へ出ることのメリットが詰め込まれているように感じました。スペインでの生活においても、「よそ者としての自分」という現実を突きつけられ寂しい思いも経験しましたが、世界を見渡せば、このような寂しい思いから人々が対立し、争い合う地域が窺えるわけで、このような経験をできたことも貴重でした。

また、このような差異を意識したアプローチというのは、多角的な視点を用いて物事を捉え、理解しようとする学問分野においても非常に助けになるのではないかと感じました。サラマンカ大学・翻訳学部での学びも非常に新鮮で、私のなかの外国学・外国語学というもののイメージが刷新されたような気がします。

日本に外国語が本格的に伝わりはじめてから、二百年ほどでしょうか。もともと日本には「社会」「個人」「美」「恋愛」などの言葉は無かったようです。幕末から明治期にかけて、西欧の才を取り入れる為、舶来の書物を日本語へと翻訳していく際に、福沢諭

吉をはじめとする当時の知識人たちの涙ぐましい努力のもとに、これらの言葉が造られました。それらの言葉がどのような知的格闘の中から生まれ、日本人のものの考え方や生き方にどのように影響を与え、導いてきたかを知ることは、外国語を学ぶ身としては得られるものが大いにあります。

例えば、「Society (社会)」に相当する言葉が日本語にはありませんでした。相当する言葉が無かったという事は、その背景に、Society に対応するような現実が当時の日本には無かったという事です。そこではじめて異国との違いを意識するようになる、或いは異国との違いに気づくことで、日本がどのような国であるかが浮かび上がってきます。

真に翻訳学(外国語学)を究めようとするれば、当該国の文化や歴史、経済あるいは習慣に目を向ける必要があるわけで、その一見遠回りに思えるような過程にこそ、知的な面白みがあると思っています

サラマンカでの10ヶ月間は自分と向き合い、また学問とも向き合う時間となりました。学問する理由は人それぞれにあるのですが、私としては、学問を通して人生を楽しむ姿勢を身に付ける事が最高の成果だと思います。昨今のように新しい情報を入手し、披露するだけで一角の知識人モドキになれてしまう時代に、海外留学をした経験だけに頼って語る癖をつけてしまうと、いずれは年と共に更新出来なくなる情報・見聞に目をつぶるしか無くなる訳で、そうなってしまっはとても勿体無いように思えます。「他人の言葉で語り、他人の目で世界を見る」このような態度に盲従してしまうのではなく、いかに自らの切り口で世界を捉えられるかが大事であり、その為には、日頃から自らの感性や関心に目を向ける必要があると思います。

まだまだ浅学の自分ですが、スペインでの留学生活を経てそれなりにものを考えられるようになりました。また、海外留学において、自分自身の変化に注目することが価値あることのように思っていましたが、今となっては、長い留学生活を経てもなお変わる事のない、自分の中にある「大切なもの」に出会えたことが一生の財産です。

メキシコ留学体験レポート

学生留学体験記

安永 優奈

イスパニア学科 3年

私は2018年の8月から1年間、スペイン語学留学のためにメキシコシティに住んでいました。休学して行くからには、その1年間で今まで知らなかったことや新しいことを経験したかったので、たくさんのことを学び、何事にも挑戦することを目標にしました。そのため留学中は自由に色々なことに挑戦するように過ごし、私の視野や可能性を広げたいと思いました。また、日本では出来ないことをしてメキシコ生活を思い切り楽しんで生きたいと考えたので、日本の生活とは違う環境に身を置くことにしました。メキシコで私なりに挑戦したことが2つあり、そのうちの1つは一人暮らしを始めたことです。

私は日本では家族と生活していたので、料理や家事をしたことがありませんでした。しかし、留学を機に自分の力で料理や家事をこなせるようになりたいと思ったので、メキシコではホームステイではなく一人で暮らすことを決めました。やはり初めのうちは全く新しい環境に戸惑い、家に帰っても誰も話す人がおらず孤独を感じて寂しかったです。特に料理は作れるようになるのに時間がかかり、慣れるまではサラダや野菜の炒め物などしか食べなかったため、栄養が偏り体をよく壊すようになってしまいました。

しかし私が体調を崩して買い物に出かけられなくても、友人がご飯や薬を持ってきてくれるなどなにかと助けてくれました。そのように周りの人々にたくさん支えられたので、一人暮らしをし始めてから、自分は人に助けられて生きているということをより深く実感するようになりました。また、日本で生活していた時は母が毎日温かく美味しい食事を作ってくれており、それが私にとっては当たり前の日常でした。しかしいざ自分で暮らしてみると、誰かが私のためにご飯を準備して待っていてくれるという生活がどれほど貴重で贅沢であるのかを痛感しました。

今の私があるのは周囲の人々のおかげだということを改めて感じたので、それからはこまめに感謝を直接伝えるようにしています。また日本に帰ってからは、家で積極的に母の料理を手伝い、さらにその他の家事もするようになりました。

私が挑戦したことの2つ目は、ストリートチルドレン支援団体でボランティアとして働いたことです。メキシコシティで暮らしていると、路上で生活する子どもや家族を毎日のように目にします。またメキシコは貧富の差が激しく、貧民街と高級住宅街は同じ国とは思えないほど街の雰囲気や住む人々の様子が違います。メキシコに来て日本とは違うその光景に衝撃を受け、路上に住む子どもたちはどのように生きるのかをより深く

学びたいと興味を持ちました。そして現地にいる今が直接子供たちと交流し現場を知るチャンスだと考えたので、支援団体を訪ねてボランティア職員として働かせてもらいました。その団体で私は子どもたちと一緒に遊び、他にも工作や勉強など彼らが楽しく過ごす手伝いをしていました。彼らの置かれる状況は様々ですが、全員が共通しているのは路上生活からから抜け出したい、自分を変えたいと考えているということです。



施設の26周年を祝うイベント

私のようなボランティアを含め、職員全員が働くうえで大切にしていることがあります。それは子ども達1人1人と向き合い、どのように生きたいのか・何を学びたいのかを一緒に探して、見つかるまで寄り添って彼らの夢を支援することです。また、共に考えることで子供たちが信頼するきっかけにもなり、彼らが路上以外に生きる居場所を見つけ出すことができます。

一方で彼らへの支援が定着しないという課題もありました。仕事があり施設に通わなくなる・家族の引っ越しで連絡を取ることができなくなるなど、職員との繋がりが切れてしまうからです。実際私が働いていた時にも、仲良くなった子どもが急に来なくなり、お別れもせず消息が絶えることがありました。そして長期的にサポートすることが難しく、悔しさが残りました。また、施設が支援を要する子どもと出会いサポートできる数にも限界があります。そのため私がボランティア活動を通して感じたのは、継続的な支援を行う、また支援の輪を広げる必要があるということです。私はさらに詳しく勉強して、この課題について改善できるような支援策を考えたいと思っています。

この留学では新しいことをやってみて初めて、私に欠けていることや人に対する甘えなど、まだまだ勉強不足のことが多くあることを自覚しました。それでもメキシコでの生活はとても楽しくかけがえのない日々であり、さらにメキシコでしかできないたくさんのことを経験することが出来ました。良い思い出や苦い経験から得たこと全てが、私の人生の糧となると思います。



テオティワカン遺跡

2019 年度イスパニア語劇団での活動

イスパニア語劇団

西井 孝輔

イスパニア学科 4年

第70回となる2019年度の語劇祭において、イスパニア語劇団はアルフォンソ・サストレ作の『猿ぐつわ』（原題：La Mordaza）を上演いたしました。本作品は、『一家の絶対的権力者である父イサイアスが起こした殺人を、息子の妻ルイサが目撃してしまう。ルイサは「殺人の件を誰かに話せば殺す」と脅されるが、恐怖に耐えられなくなった彼女は家族に秘密を打ち明けてしまう。絶対的な父親による圧倒的な支配と、その支配下に置かれ苦悩する家族の様子をありありと描く。』



そんな作品となっています。



本作品はスペインのフランコ政権を風刺するシリアスな社会劇であると言われていています。そのような難解な作品を日本人である自分たちが読み解き、お客様に伝わる演劇を作り上げるにはどうすれば良いか、それを模索し続けた練習期間でした。

個人的な意見にはなってしまいますが、4年間語劇に取り組み監督も経験した中で、語劇とは「正しい意見を探す作業」ではなく、「たくさん意見の中から、自分たちの正解を作っていく作業」だと考えるようになりました。役者・音響・照明・舞台美術・衣装メイク・演出、そして監督。一つの劇団は様々な部署で構成され、それぞれの部署ごとにも数人のメンバーがいます。当然、部署内外で異なる意見が出ますが、一部署・一劇団として一つの答えを出さなくてはなりません。しかし、正しい答えなんてものは端から存在してなくて、だからこそ学年も部署も関係なくみんなが自分の意見を出し合い、それらの意見をみんなですり合わせて納得し、自分たちの正解だと思う劇を作っていくことが本当に大事だと思うんです。一人一人違う意見をすり合わせていくことは本当に難しいですが、私はそれこそが、語劇で一番苦しくも一番楽しい時間だと思っています。



2019年度イスパニア語劇団は、本番の10日前までほとんどバラバラな状態でした。誰もが自分の意見を胸にしまい、淡々と指示に従うだけのまさに『猿ぐつわ』で描かれている家族のような状態でした。そんな状況の中で最高学年である自分に何ができるのかを模索し、自分にできることに必死で取り組みました。劇団員一人一人から考えを聞いて、それを直接話し合う場を設けました。その場で文字通り直接「ぶつかり合う」ことで、まさに「猿ぐつわ」がはずれ、皆が自分の意見を主張できるようになり、そこから劇団が一つになっていくことができました。残された練習時間も少ない中で皆が自分にできることに取り組み、最終的には後悔のない・納得のいく劇が作れたと思います。



本番の舞台では、緊張しながらも練習の成果を存分に発揮できたと思います。本番後の鳴りやまない拍手と、劇団員たちの晴れやかな姿が本当に印象的で、その瞬間の記憶は私の中で一生残り続けるだろうと思います。結果としても、劇団としてイスパニア語劇団が最優秀劇団賞と舞台美術賞をいただき、個人として最優秀主演役者賞をイサイアス役の李慶雨、最優秀助演役者賞をファン役の黒原志典が受賞しました。イスパニア語劇団がこのような評価をいただけたのは、劇団員全員で最後まで諦めずに『猿ぐつわ』、そして自分たち自身に向き合い続けられたからだと思っています。私はこのメンバーで『猿ぐつわ』を作り上げられたことを、その結果だけでなくそのプロセスをも、誇りに思います。



最後になりましたがこの場をお借りして、私たちを支えてくださった家族・友人、発音指導や台本解釈など、練習を多方面からサポートいただいた教授、第70回に至るまで語劇祭の歴史と伝統を作り上げてきたOB・OGの皆さん、そしてイスパニア語劇団を支えてくださった全ての方々に心からの感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。来年度以降もこの伝統が途切れることなく繋がっていくように努力してまいりますので、これからもイスパニア語劇団を応援よろしく願いいたします。

Libro y Pelicula interesantes

竹谷 和之
1979年（昭和54年）卒



『ブランカニエベス』（2012年・白黒サイレント）
監督・脚本 パブロ・ベルヘル

【あらすじ】

名闘牛士の娘カルメンは、幼少時から継母の執拗な「虐待」に耐えていたが、ある日命を奪われかけた。しかし「こびと闘牛士団」の一人に助けられて、彼ら一座と行動を共にするようになった。しかし記憶をなくし自分の名前も思い出せない彼女をみんなは「ブランカニエベス（白雪姫）」と呼ぶようになった。

ある日、興行先の若牛闘牛でマタドールを助けようとしてムレタ（赤布）を持った。彼女の才能は一気に花開き、かつて父親から教わった技術は身体が覚えていた。行く先々で頭角を現してめきめき腕を上げたカルメンは、セビリア闘牛場に誘われた。そこで勇敢に闘った彼女を待ち受けていたのは、あの継母であった。場内一周するときに渡されたリンゴには毒が・・・、果たして彼女を目覚めさせる者は誰なのか。この先は映画をどうぞ。

【感想】

グリム童話の「白雪姫」を1920年代のスペイン闘牛に移し替えて作製された白黒サイレント映画である。2013年スペインのアカデミー賞といわれるゴヤ賞（作品賞な

ど)を受賞した。話のあらすじはほとんど「白雪姫」の原作と変わらず予測はできるが、闘牛を題材としたストーリーに魅了される。そして現在のスペインでも、女闘牛士はタブー視され続けている。かつてのクリスティーナ・サンチェス、そして現在のマリ・パス・ベガのように男の世界へ果敢に飛び込んでいき、マタドーラへの偏見を払拭しようと試みた女性たちもいる。

これまで闘牛は光と影、男と女、生と死などの象徴表現の世界を描かれてきたが、この映画では周縁に追いやられて生きる人々（こびと）とともに、自分の居場所を見つけ出す女性とその悲劇が描かれている。さらにメリメ作『カルメン』のストーリーとも重なるように感じられ、ベルヘル監督独特の表現を楽しむことができる。日本の上映では英語字幕であったが、せめてスペイン語であればと少し不満もあった。DVD版ではその上に日本語も加わる。

映画では牛を殺さない。双方果敢に闘ったという名目で、牛は牛舎へ、マタドーラは場内一周をして観客の称賛を浴びる。なかなかそういう場面にはお目にかかれないが、過去に本当にあったと聞く。

スペインの人々は、闘牛は arte（芸術）であり espectáculo（見世物）でもある、という。近年は anti-aurino のポスターや街宣活動が、スペイン三大祭サン・フェルミンでも見られるようになった。スペインの国技を「動物愛護」で封じ込めようとする運動である。カタルーニャ州ではすでに闘牛は行われなくなった。その広がりには抗して、闘牛愛好家は「fiesta nacional」だと強調する。さて、皆さんはいかがでしょう。

和歌山県太地町のクジラ漁にシーシェパード（反捕鯨団体）が介在するのと同じように、スペイン闘牛も内外から激しく糾弾される。「動物愛護」というヨーロッパ発祥の思考が世界に広がり、徐々に一文化を追い詰め消滅させていく過程がスペイン闘牛にも見て取れる。

Libro y Pelicula interesantes

野村 竜仁
1992年（平成4年）卒



『イローナは雨とともに来る』

アルバロ・ムティス著

『イローナは雨とともに来る』(Ilona llega con la lluvia, 1988)は、コロンビアの作家アルバロ・ムティス(1923-2013)による「橋楼員マクロール」シリーズの一作である。

アルバロ・ムティスは異色の経歴を持つ作家と言えるだろう。外交官の息子としてコロンビアのボゴタに生まれ、父親の赴任先であるベルギーと、祖父が営むコロンビアのコーヒー農園を行き来しながら少年時代を過ごす。若くして詩人として頭角をあらわすが、その活動は文筆だけにとどまらず、ラジオ番組の制作に辣腕を振るい、アナウンサーや声優もこなし、さらにエッソのコロンビア支社で広報担当官を務めるなど異能の人物としても知られている。

1956年、軍事政権による弾圧を逃れるためにメキシコへ居を移す。そこでファン・ルルフォ、オクタビオ・パス、カルロス・フエンテスといったメキシコの作家と親交を結ぶかたわら、ルイス・ブニエールをはじめとする映画人とも交流し、みずからも映画関係の仕事に携わっている。また同郷であるガルシア＝マルケスとの交友も有名で、その博識と慧眼は稀代のノーベル賞作家が舌を巻くほどであったという。

ムティスはみずからを詩人として位置づけており、小説についてはその作法を知らないとしているが、『提督の雪』を皮切りに檣楼員マクロールが活躍するシリーズ七作品をわずか七年間で書き上げる。驚異的な執筆のペースとともに、これらの作品をもってセルバンテス賞、メディシス外国小説賞、ノイシュタット国際文学賞といった数々の重要な賞を獲得したことは、ムティスの小説家としての力量を雄弁に物語っている。ムティスの国際的な評価を決定づけたこのシリーズは、これまでに英語、フランス語、イタリア語などに翻訳されている。

シリーズ作品としては第二作目となる『イローナは雨とともに来る』は、艶笑と哀愁を誘う物語である。船主の破産によって仕事を失い、パナマに流れついて鬱々とした日々を過ごしていたマクロールは、旧知の女性イローナと出会う。トリエステ生まれの麗人であり、気高く自由奔放に生きるイローナは、マクロールや彼の盟友であるアラブ人の艀装家アブドゥルと組んで詐欺まがいの取引にも手を染める才気煥発な女性である。パナマで高級ブティックを営んでいた彼女は、痴情のもつれからパートナーであったハンガリー人の寡婦に去られて無聊を慰めているところだった。

再会したマクロールとイローナは旧交を温めつつ放恣な日々を謳歌していたが、やがて金銭的な窮乏に陥る。事態を打開するために二人がはじめたのは、一風変わった娼家だった。イローナのアイデアで娼婦をキャビンアテンダント風に仕立てたところ、このアイデアが図に当たり、彼女たちとの情事を求めて多くの客がやってくる。悲喜こもごもの愛憎劇が繰り広げられていく中、娼家の経営者として有閑な暮らしを送っていたマクロールとイローナだったが、ヨーロッパから流れ着いたラリッサという女の出現によってその運命が暗転する。亡霊とともに旅をしてきたと語るラリッサの怪しい魅力がイローナの心をとらえ、彼女を悲劇的な最期へといざなう。イローナを失ったマクロールはアブドゥルの船に乗り、一人パナマをあとにする。

「檣楼員マクロール」シリーズの作品には、このほかに南米の大河流域における無法な世界を描いた前述の『提督の雪』や、コロンビアでの反政府闘争を髣髴とさせる『美しき死』、アンデス奥地での鉱山採掘をめぐる冒険譚『アミルバル』、またマクロールが端役として登場する『不定期貨物船の最後の寄港』や彼の盟友アブドゥルの物語である『アブドゥル・バシユル、船の夢想家』、三つの中篇が収められた作品集『海と陸の三部作』がある。『イローナ』を含めたこれら七作品はそれぞれ趣が異なり、独立した形で読むこともできるが、複数の作品にまたがってマクロールや他の登場人物の生きざまが交錯する重層的な物語でもある。いずれも文章は平易だが密度は高く、海洋小説を思わせる冒険のなかに該博な知識が盛りこまれており、雅俗取りまぜた豊饒な世界を堪能させる。

同シリーズについてはジョウゼフ・コンラッドの影響も指摘されており、なるほど主人公のマクロールは作家コンラッドの前半生を彷彿とさせる面がある。『コンラッド短篇集』の訳者井上義夫氏によれば、コンラッドは「不定」を生きた人間であり、創作活動に専念する以前はみずからの出自と訣別するかのごとく船員として各地を転々とし、一処に落ちつくことはなかった。マクロールも、キプロスの偽造パスポートを持つ船乗りという以外にその素性を語るものはなく、国籍や外見も判然としない。船乗りとして世界各地へ赴くが、いずれも仮寓の地に過ぎず、言いかえれば旅への妄執を抱えて生きる人間である。加えて井上氏が指摘するコンラッド作品の三つの特徴は、そのままマクロールの物語にも当てはまる。まず作中人物にとって、世界とは解読を要する未知なるものであること。次に犯罪などを介して社会的規範の意味が問われる点。最後は作中人物が抱える、人生を破滅させる力を秘めた剣呑な憧れである。

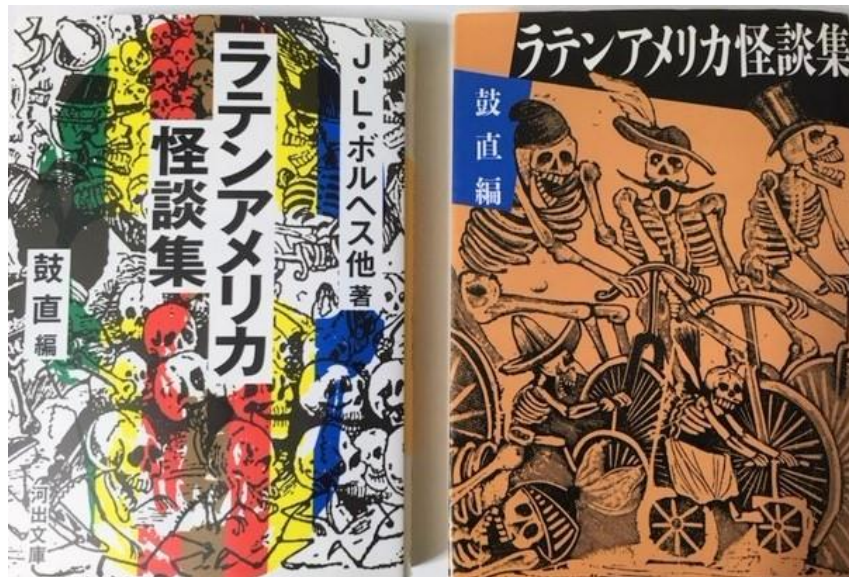
コロンビアの作家と言えばガルシア＝マルケスだが、このところファン・ガブリエル・バスケスのような新しい世代の作家の活躍も目覚ましいものがある。小説『コスタグアナ秘史』からもわかるように、バスケスはコンラッドの系譜を継ぐ作家でもあり、同作品のモチーフである『ノストローモ』をラテンアメリカ文学ブームにつながる先駆的な作品の一つとして位置づけている。

コンラッドについてはガルシア＝マルケスが絶えず読み返す作家の一人として名前を挙げているが、ガルシア＝マルケスの盟友であるムティスもコロンビアにおけるバスケスの先達として、コンラッドの系譜に連なっている。さらにコンラッドと同じく「不定」の生涯を送っている点で、ムティスはその系譜を象徴する作家でもあろう。そうしたムティスの手になる「檣楼員マクロール」シリーズは、コンラッドに対するラテンアメリカのオマージュであり、同時にその作品世界を自家薬籠中のものとした、ラテンアメリカの作家による返歌として読むことができるだろう。

Libro y Pelicula interesantes

穂原 三佳

1996年（平成8年）卒



『ラテンアメリカ怪談集』

J. L. ボルヘス他著・鼓直編・河出書房新社 2017年

2017年に河出書房新社から27年振りに『ラテンアメリカ怪談集』が新装版として出版されました。文学や講読の授業がきっかけでこの本を手にとられた方がおられるかもしれません。私も、木村榮一先生の講読の授業を通してこの本と出会いました。

90年に出版された初版は茶色の装丁で、カバー全面には楽し気に自転車に乗る骸骨たちが描かれていました。メキシコの画家ホセ・グアダルーペ・ポサーダの「自転車に乗るカラベラ」という木版画だそうです。新装版も、白と原色に彩られたポサーダの骸骨モチーフがひしめき合う、インパクトの強い表紙です。

怪談集には、ラテンアメリカ各国の短編小説が15編収められています。最も数多く紹介されているのは、20世紀以降多くの幻想文学作品を生み出してきたアルゼンチンの作家たちです。ホルヘ・ルイス・ボルヘス、フリオ・コルタサルといった世界的に有名な作家はもちろん、旧約聖書や伝説をモチーフにした数々の幻想短編を残し、ボルヘスが師と仰いだレオポルド・ルゴネスや、批評家としても知られるエンリケ・アンデルソン＝インベルの作品も収録されています。

アンデルソン＝インベルの短編のタイトル「魔法の書」とは、毎回冒頭から読み始めなければ、本文が意味不明の文字の羅列と化する奇怪な書物を指しています。ある大学教授が、この本を古書店で偶然手に入れ、寝食を忘れて読破を試みますが、物語の結末で、この「魔法の書」が決して読了できるものではないことが、思わぬ形で明らかになります。

アルゼンチン、ウルグアイなど、南米ラプラタ河地域の国々は、幻想短編を得意とする多くの作家を輩出してきましたが、他方、中米・カリブ海地域では「魔術的リアリズム」という、ラテンアメリカだけでなく、20世紀の世界文学に強い影響を及ぼした一大潮流が出現します。本書では、魔術的リアリズムの先駆者の一人、グアテマラのミゲル・アンヘル・アストゥリアスの「リダ・サル鏡」という作品が紹介されています。意中の若者の祭装束に身を包んで恋のまじないをかけようとした娘、リダ・サルの物語には、キリスト教と先コロンブス期の信仰が融合したマヤ独特の習俗と、神秘的でこの上なく美しいグアテマラの自然が描き出されています。

隣国メキシコからは、いずれも創作活動を通して「メキシコ性」を探求した、カルロス・フエンテスとオクタビオ・パスが選ばれています。フエンテスの「トラクトカツィネ」は、後の短編「アウラ」の原型となった作品と言われ、二つの作品を比べながら読むと、一層面白いのではないかと思います。詩人オクタビオ・パスの「波と暮らして」は、まさに幻想譚で、夏に海で出会った「波」と青年との恋の始まりから終焉にいたる物語が比喩に富んだ散文で綴られています。

この怪談集と出会って20年余り経ちましたが、久し振りに全ての短編を読み返し、あらためて「ラテンアメリカ」という地域の多様さに思ったりしました。乾燥した地域、密林地帯、海岸または山岳地帯といった、地理的多様性だけではありません。世界のあらゆる地域からやってきた人々が互いに影響し合い、それぞれの習俗や言語の絶え間ない混交と変容が繰り返された結果、ラテンアメリカという複雑で多様な世界が形成されたのだと、15の短編は教えてくれます。フエンテスの「トラクトカツィネ」の結末で語られる言葉はナワトル語です。ペルーのファン・ラモン・リベイロの短編「ジャカランダ」では、「アヤクーチョ」というケチュア語起源の地名の成り立ちについて言及されています。また、キューバのホセ・レサマ＝リマが東方の帝国を舞台にした「断頭遊戯」を生み出した背景に、中華街の栄えた首都ハバナでの暮らしを垣間見ることができましょう。

「編者あとがき」の中で鼓直先生がご指摘されたように、ラテンアメリカ文学においては、日本でいうところの「怪談」というジャンルに収まらない、むしろ「幻想文学」というより広いカテゴリーに属する作品が数多く生み出されてきました。背筋がぞっとす

るような話もありますが、皮肉・風刺の効いたコミカルな作品も豊富です。本書に収録された、アウグスト・モンテローソの「ミスター・テイラー」や、マヌエル・ムヒカ＝ライネスの「吸血鬼」などはその好例だといえます。

この本を初めて手に取った時、鼓先生による巻末のあとがきが、収録短編の作者たちの「会話」形式で構成されていることに驚嘆したのを覚えています。そこでは、ボルヘスやコルタサル、ムヒカ＝ライネスといった作家たちの寛いだ「声」を通して、各作家の中・長編小説や、本書に登場しなかった作家たちの魅力が語られています。350ページ余りの、この小さな文庫本は、ラテンアメリカ文学の入門書であるとともに、さらなる読書の楽しみへと導く道標でもあります。

近況報告

森本 悠子 (旧姓 斎藤) 1975年 (昭和50) 卒

スペイン語と出会って50年近くになります。卒業後も続けている付き合い(勉学、趣味、ボランティア活動等)を通じ多くのスペイン語圏の人々と交流を持つことが出来、それはかけがえのない宝物、貴重な経験となっています。今、縁あって教えるという立場に就いていますが、そこでもこの経験が大いに役立っています。いつまで続けられるかわかりませんが、今後もより多くの経験を積み、それらを役立てていきたいと思っています。

山本 哲夫 1976年 (昭和51) 卒

66歳 42.2年のサラリーマン人生卒業して1年余。こんな人生あったんかあ!と思ってる今日此の頃。読書に旅行に ME ENCUNTA LA VIDA!(あってる?)→青春真っ只中と言いたい訳。

春と秋のベトナムVN旅行。北、中、南と全て文化、風習、話し方が違い興味深々。特に南の方が好きです。(美人多い)

さてと、奥河内は楠木正成他中世の、遺物がゴロゴロ!月に20冊前後の乱読&遺跡巡りして幸せです。その内飽きてくるかも! 娘2人は、市内と宝塚の方に嫁ぎ孫3人(男)と0.5人(女予定)



和田 裕子 1976年 (昭和51) 卒

今年7月で大学講師の職を辞し、自由な時間が増えたので、大好きな台湾に通っています。中国語の勉強も始め、初めは雑音にしか聞こえなかった中国語ですが、行くたびに聴き取れる単語が増えていくのが楽しみです。イスパニア語は…春にポルトガルに行った時に少し役に立ちました。

西岡 勝樹 1987年(昭和62年)卒

大学3年時のスペイン遊学を終え、3年生2回をやり5年で卒業。あれから33年経ちました。スペイン語を活かしたいとの思いからメーカー系商社に就職、いつの間にか親会社に吸収合併。念願叶って入社6年目に新婦を伴い最初の赴任地パナマへ、3年後コスタリカへ異動。一旦帰任後、家族が一人(娘)増えサンパウロへ再赴任。9年後帰任して現在に至ります。記憶力の衰えを自覚しつつも今春から神奈川大学大学院でスペイン語に挑戦しています。

末吉 修 1987年(昭和62年)卒

2018年にイスパニア総会があることを知り、福岡から30年ぶりに神戸を訪れました。西川先生は総会や懇親会でも当時のままの優しい笑顔で卒業以来の再会をとて喜んで下さいました。卒業後いつか再会し御礼を言えたらとずっと心に引っ掛かっていたのでそれがようやく実現し、感動しました。まさかその最初の再会が最後になってしまうとは全く想像できず、大変残念で寂しい限りです。今思うと不思議な再会でした。心からご冥福をお祈り致します。

岩瀬 志野(旧姓 高津) 1988年(昭和63年)卒

西川先生の訃報を知り、新学舎の先生の研究室でひたすらスペイン語単語をパソコンに入力したことを思い出しました。私や数名の学生を連れて美味しい餃子をご馳走して頂いたのはこの入力のお手伝いをしたあとだったか?ゼミ生ではなかった私がなぜ?今となっては三十数年前の出来事で、この曖昧な記憶を確かめるすべもありませんが、いつも穏やかでいらした西川先生のお顔を忘れることはありません。心よりご冥福をお祈り致します。

フェルシーシ 亜希子（旧姓 藤原） 1995年（平成7年）卒

1991年に外大に入学後、西川先生には、1993年度よりゼミ生としてお世話になりました。その中で記憶に残っている事といえば、申し訳ないのですが勉強をしたことではなく、授業中に舞子の海に見えるカフェに連れて行って頂いたことや、東急ハンズの裏にあるスナックでベサメ・ムーチョをカラオケで熱唱されていた先生の姿など、楽しかったことばかりです。いかにもスペイン語の先生らしい、朗らかで時にシニカルな先生の話ぶりは忘れられません。卒業後も何かと相談にものっていただきましたし、何年もの間、年賀状も頂いていました。本当にありがとうございました。今でもハンズの裏を通ると先生のことを思い出します。安らかにお眠りください。

垣合 悦子（旧姓 角野） 1995年（平成7年）卒

西川先生、2018年秋のイスパニア会総会で、25年ぶりにお会いし、変わらない明るく温かい笑顔を見て、とても懐かしく、嬉しかったです。

学生時代、スペイン語の文法の複雑さに気持ちが塞ぐこともありましたが、先生はいつも明るく、優しく、おおらかで、本当に気持ちが救われていました。先生に再会した時、改めて、素敵の方に教えていただいてたんだな、と嬉しくなりました。これからこのご縁がまた繋がっていくことを願っていましたが…。

今、仕事でスペイン語を使うことがあり、もう一度勉強したいと思っています。辛くなったら、また先生の笑顔を思い出しますね。…ご縁、やっぱり繋がっていますね！

先生、本当にありがとうございました！

伊藤 かのり（旧姓 山根） 1995年（平成7年）卒

卒業してからずっと学生時代とほぼ同じところに居続けています。外大の近くに住んでいることもあり、イスパニア会の理事を引き受けることとなりました。数年前、外大前の横断歩道で信号待ちをしている時に、西川先生にお声掛けすると、「パソコン使える？」という話から、会報編集委員となり、それから年に数回お会いしたり、連絡をとっていました。返信が遅れたり、不手際があっても、穏やかに対応して下さい本当に優しい先生でした。子供がいることもあり編集委員会の後のディープな飲み会に参加できなかったのが残念でなりません。

田之上 美春（旧姓 西澤） 1995年（平成7年）卒

3年ほど前、外大で行われたオープンセミナー「スペイン語で巡る世界遺産の旅」という講座があり、講師も西川先生をはじめ懐かしい教授が揃っていたので受講してみました。西川先生は昔と変わらずお元気で、大きな目を見開いて楽しそうに笑顔で授業をされていました。なので、まさかこんなに早く訃報を聞くことになるとは思いませんでした。あの時授業を受けることができよかったです。ご冥福をお祈りいたします

本橋 祈（旧姓 柴田） 1998年（平成10年）卒

西川先生の授業を受けていたのは四半世紀も前のことなのに、訃報に接して自分でも驚くくらいに涙が出てきます。作文の授業で当てられて、「分かりません」と言うと、先生はいつも「どうして分からないの？」「どこが分からないの？」とおっしゃっていました。不真面目な学生だった私は、予習不足を見透かされているようで居心地が悪かったのですが、今思えば、あれは先生の優しさから、不出来な学生の理解できていないところを尋ねてくださっていたのでしょう。スペイン語のために先生が捧げてくださった時間とお力と心遣いの全てに、感謝をお伝えしたい気持ちでいっぱいです。

谷口 理沙 2013年(平成25年)卒



大阪の輸送用機器の部品製造販売会社の財務部に勤めており、1年ほど前からアジア・北米子会社の会計関係の監査やシステム整備のお仕事をさせて頂き、昨年19年8月にはメキシコ支社に伺う機会を頂きました。イスパニア学科での勉強と留学で培った語学を生かすことができ、充実した時間を過ごしました。20年からは家庭の都合で東京へ越すこと

となり、長年暮らして来た神戸・大阪から離れることに大変不安がありますが、新天地でも語学に触れ合う機会を作り日々励みたいと思います。



北川 暁 2016年(平成28年)卒



卒業後一般企業への就職は避け、モデルの道へと進みました。現在は商業モデルとして雑誌、広告、Webページ、企業VPやTVCM等に起用して頂いています。直近での大きなモデル業案件は福屋不動産のTVCMへのメイン出演です。

さて、活動の幅を広げようと思案したところ、思い至った結論のひとつが海外進出です。スペイン語への理解を深める目的もありスペインでのワーホリを決断しました。諸先輩方、経験者のお話を伺いたいと惟う今日この頃です。

神戸市外国語大学イスパニア会 役員名簿

2019年11月2日現在

会 長	内田 雅夫	(20回)	1971年(昭和46年)卒業	
副会長	佐藤 孝三	(20回)	1971年(昭和46年)卒業	
副会長	田岡 敬造	(25回)	1976年(昭和51年)卒業	
理事長	竹谷 和之	(28回)	1979年(昭和54年)卒業	
常任理事	田尻 陽一	(15回)	1966年(昭和41年)卒業	
	安藤 典子	(26回)	1977年(昭和52年)卒業	
	冨尾 圭子	(28回)	1979年(昭和54年)卒業	
	小野 賢一	(30回)	1981年(昭和56年)卒業	
	野村 竜仁	(41回)	1992年(平成4年)卒業	
	成田 瑞穂	(45回)	1996年(平成8年)卒業	
	穂原 三佳	(45回)	1996年(平成8年)卒業	
	飯島 祐子	(47回)	1998年(平成10年)卒業	
	理 事	谷 善三	(16回)	1967年(昭和42年)卒業
		池沢 英一	(18回)	1969年(昭和44年)卒業
柴野 元秀		(19回)	1970年(昭和45年)卒業	
増野 俊則		(22回)	1973年(昭和48年)卒業	
中嶋 昭		(24回)	1975年(昭和50年)卒業	
齋藤 仁		(24回)	1975年(昭和50年)卒業	
藤本 王子		(31回)	1982年(昭和57年)卒業	
塩川 雅美		(32回)	1983年(昭和58年)卒業	
石田 敦子		(33回)	1984年(昭和59年)卒業	
伊藤 卓郎		(35回)	1986年(昭和61年)卒業	
中澤 純一		(43回)	1994年(平成6年)卒業	
吉田 昌洪		(43回)	1994年(平成6年)卒業	
伊藤 かお里		(44回)	1995年(平成7年)卒業	
監 事	高岡 麻衣	(44回)	1995年(平成7年)卒業	
	森川 香織	(53回)	2004年(平成16年)卒業	

編集後記

「ええから飲めよ、西川！」

入学したての新歓合宿。お酒が入って饒舌になり独演会を始めた西川先生に対して悪友に押されて発したこの暴言が、僕が初めて西川先生と交わした言葉だった。

「ああ、君たちのようなヒドイ新入生が入ってきて僕はなんて不幸なんだ！」と、その後もニコニコしながら一緒にお酒を飲んでくれた。

4年後の謝恩会。先生に入学時の暴言を詫びた。

「ああ、君のようなヒドイ学生を社会に送り出すなんて！そんな無責任なことは僕は断じてできない！」と、ニコニコしながら僕らを送り出してくれた。

20年後。縁あってイスパニア会の会報作成を手伝うことになった。編集会議後はいつもの先生行きつけのスナック。

「ああ、君のようなヒドイ学生とまた一緒になるなんて！」と、ニコニコしながらいつもの十八番を披露してくれていた。

2019年7月。

「体調がすぐれないので編集委員長を辞退します」というメールが先生から届いた。

そしてそのまま、あっという間に先生はいなくなってしまった。

西川先生、最後の暴言です。

先生、ヒドイです。

誰に先生との思い出を聞いても「いつもニコニコしててなあ」とか「嫌な顔ひとつせんとなあ」とか、笑顔の先生の話しか出てこないじゃないですか。

誰が先生との時間を思い出しても、どこを切り取っても、楽しそうな笑顔の先生しか浮かんでこないじゃないですか。

だからね、先生。

みんな先生がここにいなくてさみしいのに、思い出したら笑顔の先生しか浮かんでこないから、みんな悲しいのに思わず微笑んでしまうんですよ。そして、「先生は本当にもういないんだ」という事実が静かに胸を衝くんです。心の奥が、鈍く、深く、うずくんです。

先生が大切に作っていたこの会報の編集委員長を引き継ぐことになりました。
「吉田君のようなヒドイ男が跡を継ぐなんて！」と、ニコニコ笑ってくれますか？

先生のようにヒドイ恩師に恵まれて、僕たちは本当に幸運でした。これからはそちらから、ニコニコとこちらを見守っててください。

西川先生、今まで本当にありがとうございました。

心よりご冥福をお祈りいたします。

合掌。

会報編集委員

齋藤 仁
田岡 敬造
竹谷 和之
伊藤 かお里
吉田 昌洪（記）

イスパニア会 会報 第7号

神戸市外国語大学イスパニア学科
イスパニア会

イスパニア会会報 第7号

2020年3月31日 発行

発行責任者 内田 雅夫

編集責任者 吉田 昌洪

発行所 イシダ印刷株式会社
